

3b
810
昭2n

農村用

高等小學讀本卷四

文部省

43093

教科書文庫

4
8/0
32-1937
2000.0
80161

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室



高等小學讀本卷四

文部省

農村用



36

810

BB/2 n

陸

目録

第一課 讀書	一	第十六課 熊本城	八十六
第二課 武藏野	六	第十七課 ローマの舊都	九十一
第三課 すゝき原	十六	第十八課 大樹	九十九
第四課 齋田植式	十七	第十九課 鬼怒川の畔	百三
第五課 大嘗祭	三十	第二十課 土の匂	百九
第六課 祭祀と農業	三十四	第二十一課 雪	百十一
第七課 蓼蟲	三十七	第二十二課 鱈場蟹	百十五
第八課 渡り鳥	四十	第二十三課 東西雜話	百十九
第九課 田園の曲	四十八	第二十四課 ボアソナード君の歸國を送る詞	百二十五
第十課 我が農業と對外貿易	五十二	第二十五課 道徳と法律	百二十八
第十一課 緬羊	五十八	第二十六課 鍊	百三十二
第十二課 ハワイ通信	六十五	第二十七課 ゆく川の	百三十九
第十三課 手紙の認め方	七十四	第二十八課 露の臺	百四十一
第十四課 柳生宗矩	七十七	第二十九課 峠の茶屋	百四十四
第十五課 國寶	八十三	第三十課 國語と愛國心	百五十一

高讀農四

高讀農四

高等小學讀本 卷四

第一課 讀書

我等は何のために學校に學ぶか。いふまでもなく智能を啓發し、徳器を成就（カシコケル）するためである。然らば學校を卒業すれば、我等の智徳は十分であるか。否々、學問には際限がない。學校で學ぶ知識は九牛の一毛にも過ぎない。至善至徳の域に達するのは、畢生の力を盡くしても及び難い。學校は智徳の基礎を造る處に過ぎないから、我等は一生を通じて修養に力め、其の大成を期せねばならぬ。

第一課 讀書

一

若し學校を卒業したただけで、更に進んで自己の修養に志さなければ、將來の進歩は望まれないのみならず、折角學校で築いた基礎までもうちこはして、あたかも多年の修業をむだにしてしまふ。學校を卒業してそれへの職業に就いて後も、常に學校に在る時と同じ心持で、絶えず自己の智徳を進めようと力めて行く人にして、始めてりつばな國民となり得られるのである。それこそ學校にはいつた目的にもかなふし、國家が學校を建てた趣旨にも合するのである。

社會に出て實務に當れば、學校で學んだだけでは足りないことを悟る場合もあらうし、又學校では全く學ば

なかつた事柄に出會ふ場合も多いに相違ない。世には實世間・活社會に入れば、實世間・活社會が即ち種々の事柄を教へてくれると言ふ人もある。これも一應もつともなことではあるが、何時も世間からの教を待つばかりでは不十分である。他の教を待たず、常に自ら進んで自己を教育する覺悟がなくてはならぬ。學校で接觸した師友が何時も傍に來て注意や指導をしてくれるものではないから、先生や友人と同様に依頼することの出来る忠告者を求める必要がある。それは何かと言へば、書物である。書物は我等の修養を助ける大切な師友である。

讀書を少數の學者の仕事と思つた時代は既に過ぎた。今は國民一般が讀書によつて各自の智徳を磨くべき時代である。身分・職業の如何にかゝらず、學校で得た讀書力を活用して、常に自己の業務に關する知識を進め、自己の品性を高め、趣味を高尙にすることが必要である。必ずしも程度の高い書物を讀めといふのではない。それ〴〵の業務嗜好に應じて適當な書物を讀む中には、必ず何等かの修養を積み、いくばくかの利益を受けるのである。

昔は書物が少くて、一冊の書物を求めるためにわざわざ遠方に出掛け、又は人の藏書を借りて夜も寝ずに寫

高讀農四

高讀農四

し取つて勉強したといふやうな話がいくらもある。今はどんな田舎でも、大抵の書物は得られぬことはない。又忙しくて讀書の暇がないといふ人も往々あるが、心掛一つで、毎日いくらかの時間を讀書のために割くことは、むづかしい事ではない。本居宣長のりながにも、

をり〴〵に遊ぶいとまはある人の

いとまなしとてふみ讀まぬかな

と詠じた歌がある。

こゝに甲乙の二國があつて、甲國の國民の大多數は争うて自己教育のために讀書するのに引きかへ、乙國の國民は何等讀書に興味を有しないとすれば、兩國の國

民の將來に於て、どれだけの差が生ずるであらうか。さればこそ今日文明國に於ては、到る處に各種の圖書館を設立し、國民に讀書の便宜を與へることを競つてゐるのである。

第二課 武藏野

一

昔の武藏野は、萱原のはてなき光景を以て其の美を稱せられてゐたやうに言傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。即ち木は主に檜なの類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌出る。其の變化が秩父ちちぶ連山以東十數里の野

高讀農四

高讀農四

一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠陰に、黄葉に、さまざまの光景を呈する。自分はしばしば思つた、若し武藏野の林が檜なの類でなく、松か何かであつたら、極めて變化に乏しい、色彩一様なものとなつて、さまで珍重するに足らないだらうと。檜なの類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨がさゝやく。木枯が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千萬の木きの葉高く大空に舞うて、小鳥の群かの如く遠く飛去る。木の葉落盡くせば、方十數里の地域にわたる林が一時に裸になつて、青く澄んだ冬の空が高く此の上にかゝり、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段

澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十
六日の日記に、林の奥に坐して四顧し、傾聴し、諦視し、黙
想す。」と書いた。耳を傾けて聴くといふことが、どんなに
秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つてゐ
るだらう。秋ならば林の中より起る音、冬ならば林の彼
方遠く響く音。――

鳥の羽音、さへづる聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。
草むらの陰、林の奥にすたく蟲の音。空車、荷車の林を廻
り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音。こ
れは騎兵演習の斥候か何かである。何事をか聲高に話
しながら行く村の人の聲、それも何時しか遠ざかつて

行く。獨り寂しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。
隣の林でだしぬけに起る銃音。或時自分が犬を連れて
近所の林を訪ひ、切株に腰をかけて本を讀んでゐると、
突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足もとにね
てゐた犬が耳を立てて、きつと其の方を見つめた。それ
ぎりであつた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には
栗の木も随分多いから。若しそれ時雨の音に至つては、
これほど幽寂なものはない。山家の時雨は、和歌の題に
までなつてゐる。しかし廣い、野末から野末へと、林
を越え、森を越え、田を横ぎり、また林を越えて、しのびや
かに通り行く武藏野の時雨の音は、如何にも静かだ、お

ほやうな趣があり、優しく懐かしいものである。自分は嘗て北海道の深林の時雨にあつたことがある。これはまた人跡絶無の境であるから、其の趣は更に深い。其の代り、武藏野の時雨の、人懐かしくさゝやくが如き趣はない。

二

武藏野を散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、ただ縦横に通ずる數十條の路を當もなく歩くことによつて、始めて得られる。春・夏・秋・冬・朝・晝・夕・夜・月にも、雪にも、

風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此の路をぶらぶら歩いて、思ひつき次第に右し左しすれば、隨處に我等を満足させるものがある。これが實にまた武藏野の一特色だらうと、自分はしみじみ感じてゐる。されば、君若し一の小徑を行き、忽ち三條に分れる處に出たなら、困るに及ばない、君の杖を立てて倒れた方へ行き給へ。或は其の路が君を思ひもよらぬ處に導くかも知れぬ。其處は林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、其の前に少しばかりの空地があつて、其の横の方にをみなへしなど咲いてゐることもあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いてゐたら君の幸福である。すぐ

引返して左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて、君の
前に見渡しのの広い野が開ける。足もとから少しだらだ
ら下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つて
ゐる。萱原の先が畠で、畠の先に背の低い林が一むら茂
り、其の林の上に遠く杉の小さい森が見え、地平線の上
に淡々しい雲が集つてゐて、雲の色にまがひさりを連
山が、其の間に少しづつ見える。小春の日の光がのどか
に照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。若し萱原の方
へ下りて行くなら、今まで見えた広い景色が悉く隠れ
てしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく、
細長い池が萱原と林との間に隠れてゐたのを發見す

る。水は清く澄み、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映
してゐる。水のほとりには枯蘆あしが少しばかり生えてゐ
る。此の池のほとりの小路を暫く行くと、また二つに分
れる。右に行けば林、左に行けば坂。君は必ず坂を登るだ
らう。とかく武藏野を散歩するのに、高い處高い處と選
びたくなるのは、何とかして広い眺望を求めらるからで、
しかも其の望は容易に達せられない。見下すやうな眺
望は決して得られぬ。それは初からあきらめたがよい。
眞直な路で、兩側とも十分に黄葉した林が四五町も續
く處に出ることがある。此の路を獨り靜かに歩む樂し
さ。右側の林の頂は夕日が鮮かに輝いてゐる。をり／＼

落葉の音が聞えるばかり、あたりはしんとして如何にも寂しい。前にも後にも人影見えず、誰にもあはない。若しそれが木の葉落盡くした頃ならば、路は落葉に埋れて、一足毎にがさ／＼と音がする。林の奥まで見すかされ、梢の先は針の如く細く青空を指してゐる。尙さら人にあはない。愈、寂しい。落葉を踏む自分の足音ばかりが高くとま／＼一羽の山鳩があわた／＼しく飛去る羽音に驚かされる。

同じ路を引返して歸るは愚である。迷つたところが今の武藏野に過ぎない。まさか行暮れて困ることもあるまい。歸りもやはりおほよその方角をきめて、別な路を

當もなく歩くが妙。さうすると思はず落日の美觀を得ることがある。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染まつて、見るうちにさま／＼の形に變ずる。連山の頂は、銀の鎖のやうな雪が次第に遠く北に走つて、未は暗澹たる雲の中に没してしまふ。

日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れんとする。寒さが身にしむ。其の時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうである。突然また野に出る。君は其の時、

山は暮れて野はたそがれの薄かな

蕪村むら

の名句を思ひ出すだらう。(國木田哲夫「獨歩全集」ニ據ル)

第三課 すゝき原

蕪村

雲かゝる高嶺より

吹下す秋風に

果もなくなびきわたりて、

波なせるはなすゝき。

一筋の中みちを

稀まに行く人と馬、

沖へ漕ぐ小舟の如く

見る中にかくろひつ。

霧たてば風絶えて、

日はかぎり、山見えぬ。

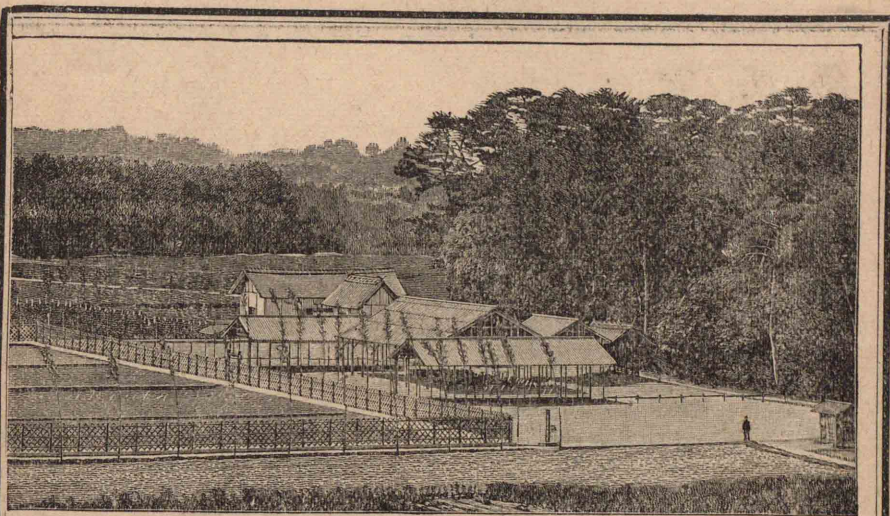
ほのじろくたゝほのじろく

海なせるすゝき原。

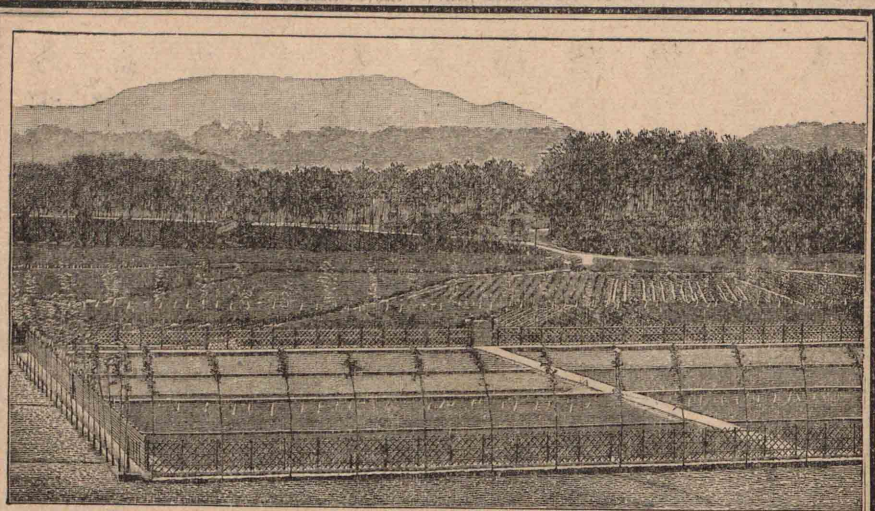
第四課 齋田田植式

一 悠紀齋田

官幣中社御上神社と三上山との間、六十五アールを長方形に區切つて定められた大嘗祭悠紀齋田は、今や森嚴の氣に包まれてゐる。四方を圍む青竹の矢來のすが



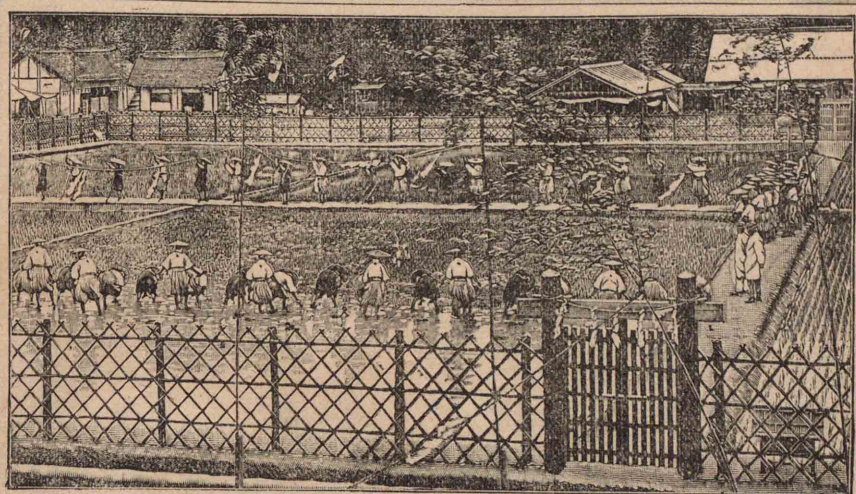
すがしき。矢來の外を廻らす忌竹が、薄曇の朝空の下に、しめ縄を張つたまゝ、そよもしない。昭和三年六月一日、田植式の當日である。齋場は齋田の西、御上神社の森を背にして設けられてゐる。正面の最も奥に、神殿が神々しく拜せられる。今日の盛儀に招かれた参列者は、既に左右の幄舎に入つて着席した。一般の拜觀者は、齋場・齋田を遠く取りまき、或は三上山の松



林の間に黒々と群がつてゐる。午前十時、齋主官幣大社多賀神社宮司以下祭員・樂人・舞姫は列を正して参進し、神殿の前方、中央の幄舎に入つて所定の座に着く。祭主滋賀縣知事を始め、藍の直垂に同じ色の指貫を穿ち、風折烏帽子を戴いた大田主や、齋田關係の諸員其他が同じく参進し、齋主・祭員等の班列と相對して着席した。やがて一祭員は進んで祓詞を讀

み、他の祭員二名は大麻塩湯を執つて一同を祓ひ清める。副齋主はすががきの樂の音の中に降神の詞を奏する。續いて海の幸山の幸が神の大前に獻ぜられた。そこで齋主が嚴かに今日の御田植の祝詞を奏すれば、祭主大田主を始め參列諸員が玉串を捧げた。それから奉納の倭舞檜扇舞が始められた。倭舞は伊勢の神宮で行はれる太古の舞である。小學校の兒童から選ばれた舞姫八名は、金色の冠を戴き、松と鶴とを縁に染めた白衣に緋の長袴を穿ち、手にくゝ五色の絹緒のさかきを持つてゐる。妙なる樂の音につれて歌ふ歌、宮人のさせるさかきをわれさして、萬代までに奏で遊ば

んに合はせて、舞姬たちは美しく舞つた。次の檜扇舞は多賀神社で行はれる古儀である。多賀神社の舞姫四名が、緑模様の白衣に緋の袴を着け、檜扇をかざし、神樂鈴を振りながら、手振もゆかしく舞納めた。愈、田植の行事である。先づ齋主に導かれて、祭主大田主、奉耕者等が齋田へ參入した。奉耕者、男六十五名、何れも白の上着に黄の指貫、黒の手甲、脚絆を着けてゐる。女三十五名、上着は藍、指貫は緋、手甲、脚絆は淺黄である。男も女も素足に草履をはき、頭には菅笠をかぶつてゐる。これらの男女には、植手、苗配、歌手、踊手など、今日の役目がそれ／＼割當てられてゐる。



役割に應じて各が定め的位置に着くと、やがて太鼓が鳴った。太鼓に合はせて田植歌が始った。踊手は歌に合はせて、簡素な踊を踊る。歌と踊につれて、植手は早苗をさして行く。

一つ日の本瑞穂の國は穂に
 穂榮えて千代八千代
 二つ再び得難いほまれ御代
 の初の御田植
 かういふ歌が十まで續いて、それ

高讀農四

高讀農四

が二度繰返された時に田植の行事は終つた。正午である。午後には更に之を植ゑつき、明後日までかゝつて全部の田植を終るといふ。

祭主・齋主・大田主・奉耕者等は齋場の座に復した。神饌が撤せられ、昇神の詞が奏せられて、今日の田植式は終つた。早苗を植ゑてゐた頃から煙るが如く降出した雨は、此の頃漸く繁くなつた。

二 主基齋田

昭和三年六月五日、今日は主基齋田の田植式が行はれる。昨日の午後は空も次第に曇つて來たため、今日の天気は殊更氣づかはれたが、起きてみると、空は見事に晴

れてゐる。露をふくんだ緑樹の陰に朝の光がきらめき、さわやかな大氣は筑紫平野の隅々にも躍つてゐるかと思はれた。其の中を、早良郡脇山村の齋田を目ざして、群集は朝まだきから動く。九州全土、わけても主基地方たる福岡縣の視聽は、此の齋田に集められてゐるのである。

齋場は塵一つ留めず洒掃せられて、午前十時の至るのを待つてゐる。左右の幄舎には參列者が着席し、齋場齋田を圍んで、一般拜觀者は、頭上に照りつける強い日ざしを物ともせず、襟を正して居並んでゐる。

やがて齋主官幣中社太宰府神社宮司以下祭員・樂人一

同は、所定の席に列座した。それらの人々に續いて、祭主福岡縣知事・大田主を始め、齋田關係の諸員等も順次席に着いた。大田主は緑の狩衣かりぎよに白の指貫さしぬきを穿ち、立烏帽子たちからかほを戴いてゐる。

午前十時、祭員の一人は、一同が起立し低頭してゐる間に、嚴かに祓詞はらひことを讀んだ。かくて式は開始せられ、大麻・塩湯・降神・獻饌の行事はかたの如くに進められた。終つて齋主は莊重に祝詞を奏し、次いで八名の祭員を従へ、齋田の中央に立つて、此の秋の豊穰とよみを祈願した。

續いて八少女舞やをとめが始つた。村内から選ばれた八名の舞姫は、緋の袴、白い紗しやに濃緑の裏を附けた桂かきを装ひ、裳ももの

裾を引きつゝ、樂の音につれて靜かに拜殿に上つた。肅然として總べての人が物音をひそめた中に、それらの舞姫はやがて神前にぬかづき、明治天皇の御製、

日の本の國の光のそひゆくも

神の御稜威によりてなりけり

にひばりの田づら多くも見ゆるかな

いそしむ民のちからしられて

すめ神にはつほさゝげて國民と

共に年ある秋を祝はん

をそのまま、歌詞にとつた樂人の歌に和して、檜扇をかざしながら、立居もしとやかに舞ふ。其の後、祭主以下が

順次に玉串を捧げた。

次は田植舞である。舞手三十二名の早少女は、此の時齋田の正門の前に立つた。白の上着に緋の袴の式服を着けた十二名の早少女は、樂人と共に歌手となつて、明治天皇の御製、

早苗とるしづが菅笠いにしへの

手ぶりおぼえてなつかしきかな

を詞に歌を歌ふ。歌に合はせて、舞手は菅笠を手に執り、手拍子身振おもしろく舞始める。昭代の二字を模様に白く抜いた久留米がすりの上着に、博多の帯をしめ、博多しぼりの赤のたすきをかけた作業服姿で舞ふ。歌と舞



業服姿の早少女が齋田の中央へ進んだ。祭主は早苗七把を大田主に渡し、大田主は更に之を奉耕者に渡した。さうして徐に歌ひ出された田植歌、

とが、初夏の青空の下に、ひなびた、しかし端正な趣を現じた。

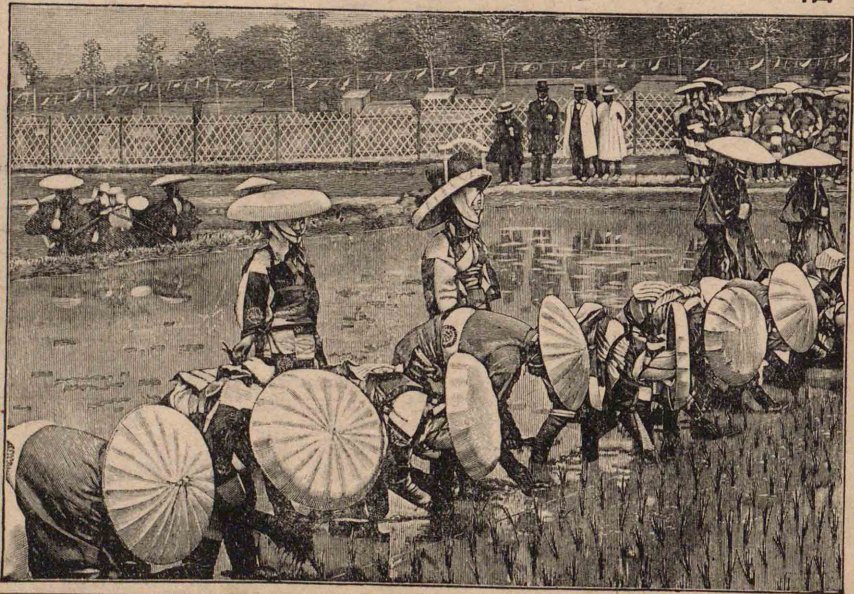
田植舞が終り、早少女がもとの座に復すると、盛装した牛が齋田に参入する。祭主・齋主・大田主等に伴なはれて、藍と白との染分の上着に、白茶の指貫、黒の手甲・脚絆を着け、菅笠をかぶつた男の奉耕者、作

高讀農四

早良脇山主基齋田の稻は昭代玉の苗

以下三つが幾度か繰返される中に、早苗は美しく植ゑられて行つた。

式も終つて大田主・奉耕者等がもとの席に復した時、嚴かな奏樂の中に撤饌や昇神の行事が行はれた。かうして今日の田植式は終つたのである。正午を三十分程過ぎてゐる。



た。

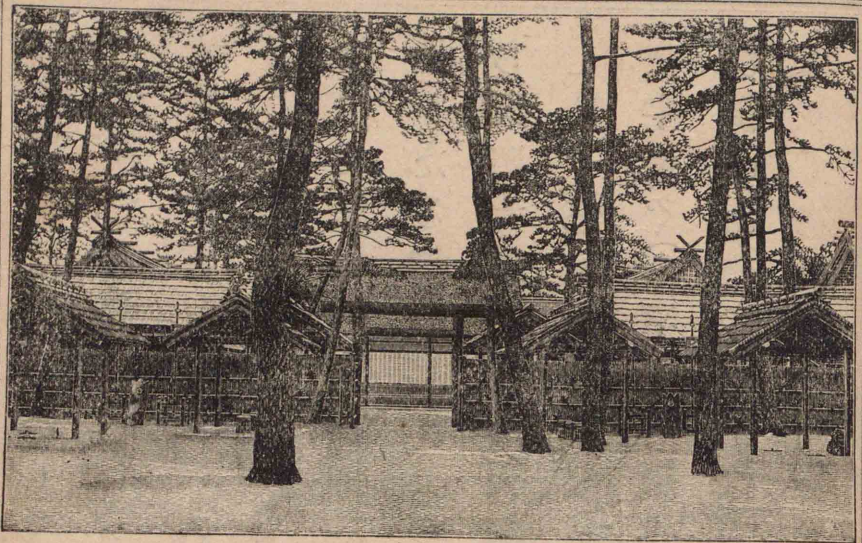
第五課 大嘗祭

大嘗祭は天皇御即位の後、豊葦原瑞穗國の新穀にて造りたる御酒・御食を、皇祖天照大神を始め天神地祇に捧げ給ひ、御親らもきこしめす祭祀なり。

大嘗祭は天照大神が天狹田長田に稻を植ゑ、其の新穀を以て新嘗を行ひ、皇孫瓊杵尊の降臨に際し齋庭の稻穂を授けまししに由來すと稱せらる。皇祖が皇孫に齋庭の稻穂を授けまししは、皇孫の御食糧として、また皇孫の統べ給ふ國民の食糧として賜ひしものなり。此の故に、歴代の天皇は概ね御代の初に大嘗祭を行はせ

高讀農四

高讀農四



給ひて、皇祖の御恵を謝し給ひき。

大嘗祭は上古の遺風に従ひ、大嘗宮に於て行はるゝ極めて嚴肅なる御儀なり。大嘗宮は御祭毎に新に造營せらるゝものにして、東西相並ぶ悠紀殿と主基殿とより成る。大正四年十一月及び昭和三年十一月の大嘗祭には、京都皇宮の仙洞御所跡に建てさせ給へり。御屋根は萱ぶ

き、御用材は黒木にして、柴垣を廻らしたる、上古のまゝの質樸なる御建物なり。

大嘗祭の當日は、夜に入りて悠紀殿供饌の儀を行はせらる。天皇は廻立殿にて御ゆあみあり、御祭服を召させ給ひて悠紀殿に渡御あらせられ、悠紀齋田の新穀にて造りたる御酒、御食、其の他くさくさのものをもみてづから天照大神を始め天神地祇に供へ給ひ、御親らもきこしめす。悠紀殿の御祭終れば廻立殿に還御あらせらる。夜半過ぐる頃、主基殿供饌の儀あり。すなはち天皇は再び御ゆあみの上、御祭服を改めさせられ、主基殿に渡御ありて、悠紀殿と同様の御祭を行はせ給ひ、曉に及びて

終る。

悠紀、主基兩殿供饌の儀の間は、夜色黒きに電燭概ね滅せられ、殿上はみあかしほの暗く、庭上にはたゞ燎火あるのみ。殿上の御儀はいふも畏し。庭前には、一面の銀砂に映ずる燎火の、時折さし添へらるゝ薪に一きはさやかなる火影の間より、柴垣の彼方、殿舎の御屋根ほのかに拜せられ、神門の外、衛門の官人の音もなく立てる姿、模糊として樹間に隠見す。しかも御儀の漸く進み行くに随ひ、奏樂の旋律四邊の幽寂を破りて、餘韻の長く漂へるを聞けば、其の身さながら太古の世にあるの想あり。

第六課 祭祀と農業

我が國の一切の禮儀は朝儀が其の根本であり、朝儀は即ち祭祀が其の根本である。けだし皇室があらゆる正しいもの、美しいものの淵源であり、模範であらせられることは、我が國體の萬國無比なものと同様、他の國々には眞似の出來ぬことである。

上古の祭祀は天皇が國民の幸福を神に祈られたもので、まつりは即ち國家の「まつりごと」であつた。しかも其の「まつりごと」は、國民の生命に關する農事を主眼として行はれた。「まつりごと」の中、二月の祈年祭に先づ今年の豊穰を祈られるのを始として、龍田の風の祭、廣瀬の

高讀農四

高讀農四

水の祭、皆五穀の豊稔を祈り給ふのである。新嘗祭は國家の重要な祭祀であり、大嘗祭は御一代一度の御盛儀である。

大年の神とか御年の神とかいふ神名を見ても、亦農業に關係の深いことがわかる。國土經營者たる大國主少彥名の二神を引合はせた久延毘古の神が、案山子であるのもおもしろい。天照大神は、田を作り機を織る道を御授けになつた。伊勢の外宮の豊受大神は食膳の神であらせられる。歴代の天皇・皇后が常に農業を御奨勵になつてゐるのも、つまり天照大神の御事業を畏んで、之を繼がせられるといふことに外ならぬ。

農を以て立國の大本とした精神は、開闢以來少しも變らぬ。武家時代には武士が四民の上に位し、農民は粗衣粗食に甘んじて耕作するものときめられてはゐたが、それでも尙農を士の次に置いて、工商の上に位させた。「お百姓」といふ語はあつても「お町人」といふ語はなかつた。そのかみ皇室が農民を以て、畏くも「おほみたから」と稱せられた御精神が、武家政治の時代にも尙傳はつてゐたのである。今日四民平等の世の中、商工も國家富強の爲に大切であることはいふまでもないが、しかし農民が國初以來の主たる「おほみたから」であつたといふ信念だけは失ひたくないものである。朝廷の祭祀も依

高讀農四

高讀農四

然として昔のまゝに行はせられてゐるのである。(芳賀

矢「日本人」ニ據ル)

第七課 蓑蟲

我が國の歌人は、秋風の吹來る頃となれば、蓑蟲が「ち、ち、」又は「父戀し」となくと思つてゐる。實際此の蟲が鳴いたら、秋の寂しさに一種の詩味を添へるであらうが、あやにく蓑蟲には何等の發音器もない。木の葉や皮をかむ音をマイクローフォンで聴取つたら、或は「ち、ち、」と聞えることもあらうけれども、通常我々の耳には聞えるものでない。故に多分想像に富んだ歌人が、他の蟲の鳴くのを蓑蟲と聞誤つたものであらう。これはみ、

ずを「うたひめ」などと呼んで、夏の夜「じい〜」と鳴くやうに思つてゐるが、鳴いてゐる處を掘つてみると、意外にもおけらが飛出す、それと同じことである。蓑蟲は蛾の幼蟲で、我が國に凡そ七種居る。此の蟲は自分のすみかとして、口から絲を吐き、木の葉や皮又は小枝を綴り合はせて袋をこしらへる。さうして木の枝などにくつついてゐる。此の袋の内面は、絹で裏打したやうに滑らかなになつてゐる。外見が蓑のやうなので、蓑蟲といふ。此の袋の構造も、種類によつてそれ〜違つてゐる。木の枝を縦に並べたもの、横にしたもの、螺旋狀にしたもの、木の葉を集めたもの、木の皮を綴つたものな

ど、いろ〜ある。しかし總べての袋に共通な性質は、其のすみかの近傍にある物にまねて、鳥などの目を欺くやうにしてあることである。即ち擬態の好い例として、生物學上有名なものになつてゐるのである。此の袋を開いて見ると、中に居るのは、いも蟲かしやくとり蟲を短くしたやうな、太つた小さい蟲である。頭と胸は黒く、堅く、腹は軟かて灰黄色、胸部には三對の脚、腹部には五對の脚がある。疑もなくこれ蛾の幼蟲である。此の幼蟲は袋の中で蛹となる。此の蛹は袋のさきを破つて半分ばかり出て、蛾になつて飛出すのであるが、それは皆雄である。其の蛾を「みのが」といふ。通常羽を廣げ

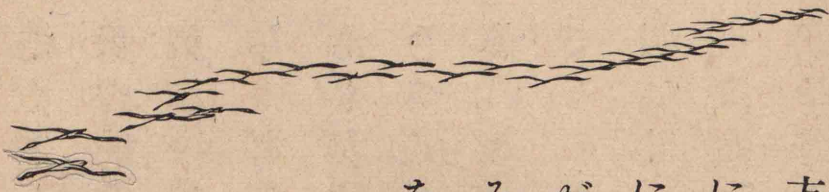
た大きさは六七分の黒い蛾である。

雌は一生を袋の中に暮して、一種隱遁的とんの生活をする。親になつても飛ぶ必要がないから、羽もなく、又食物を取る必要もないから、口も極めて不完全である。雌は數百の卵を自分のすみかとする袋の中に産み、やせ衰へて死んでしまふ。卵は翌年の夏の初孵かへつて幼蟲となる。

(谷津直秀「趣味の動物」ニ據ル)

第八課 渡り鳥

私たちが七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁がんが渡つた。私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路のろに立つて、空の一



方を仰ぎながら、雁がんよ、竿さきになれ。竿さきになつたら鈎かぎになれ。と、其の長い行列が漸次しんじに雲の中のちうにじみ込んでしまふまで、聲をからして叫んだものだ。が、今では雁も少くなつて、晝間其の長い列が空を渡ることは、よくく人氣じんき遠い野

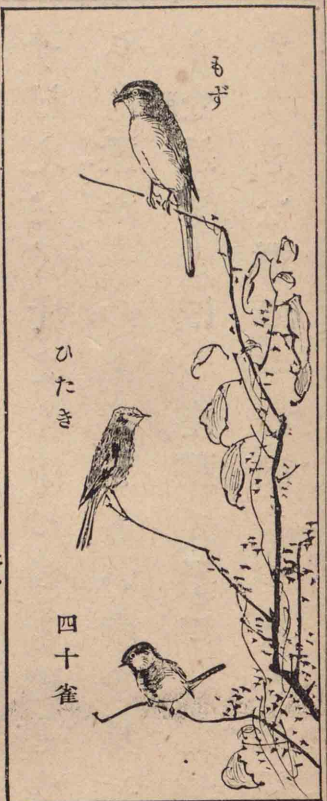
雁



原はらか何處どこかでないと、めつたに見られなくなつた。其の頃は又うちの後の岡おかに行つてみると、葉の落ちかゝつた雜木林ざもくりんに、小鳥が

たくさん来てゐたものだ。

秋の彼岸が過ぎて、そろ／＼日影が黄色がかつて来ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこらの木立で甲高い鋭いもずの聲を聞くことがある。ああ、もう秋だな。と思はず振返つて見ると、小さな櫟にまじつてづぬけて背の高い榆の木にもずが一羽止つて、黄いろい夕日を受けて、羽莖が金のやりにきら／＼してゐるのが見える。私たちは其の瞬間、言ひやりのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。次にはひたきが来る。山家の午過、ものうさうなこぼろぎの聲も何時の間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音



までがはつきりと耳に入る静けさの底に、何處からともなく微かな聲が漏

れて来る。すると木陰の葦叢か何處かで餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を上げる。其の拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうに、小鳥がついと身をそらして逃げていつてしまふ。それがひたきだ。

此の鳥は、まるで悲哀を懷いてゐる人のやうに、大抵は連に離れて唯ひとり出て来る。さうしてそこらの小

枝に止ると、ひよくりくくと軽いお辭儀をして、さ、やくやうな聲で歌ひ出す。

ひたきが来て、ものの十日とた、ぬ間に、四十雀が来る。此の鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群をなして来る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でも降るやうに、細かい羽音がさつと空をかすめて聞える。さうして、そこらの木立に下りるとすぐに、めまぐるしい程すばしこくそこらをつ、き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔かみのあるまるい胸を見せて、銀の鈴を振るやうな透きとほつた聲で、早口にしゃべり続ける。かうした大きな群の中には、きつとまだ羽の延びきらない灰

色のうぶ毛そのまゝの雛がまじつてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙返することもあるが、そこはまたなれたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で木はだのひびをついたりする。

小雪がちらつく頃になると、みそさゞいが来る。これはひたきと同じやうに、大抵ひとりぼつちで、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして来る。冬の初の午過、山近い田舎の小家で、ちいさんは火燧にもぐり込んでこくりこくりと居眠をする。其の側ではあさんはせつせと絲車を繰つてゐる。すゝけた障子に、軒につるした干菜

の影がみすぼらしくうつつて、
 時折小鳥の影がちらついたり
 する。どうかして絲目が切れて、
 眠さうな錘つちの音がぱつたり止
 むと、こそくと掛菜をむしる音がす
 るが、老人の耳にそんな音の聴取ききとれよ
 うはずはない。ばあさんはうつむいた
 まゝ、また絲を紡つむぎにかゝる。さうから
 する間に、鳥は舌打しつうをするやうな聲を
 立てながら、ひよいくと小刻みに垣
 根を傳はつて、隣から隣へと狭苦しい



物陰を出たりはいつたりして移つて行くのだ。
 みそさゝいと後先になつてほゝじろが来る。冷たい雨
 のびしよくと降る中を、獨者のほゝじろが灰色の胸
 までぐしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に
 止つてゐるのを見ると、私の郷里で此の鳥の鳴聲を解
 いて、

一筆啓上仕る。

子供泣かすな、火の用心。

今度の便に金十兩、

やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言傳へてゐるのを思ひ出す。

後の雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもうそろそろうづらが来、しぎが来てゐる。(薄田淳介「泣菫文集」ニ據ル)

第九課 田園の曲

夕日

我が足や、深く
畠の土を踏み、
柔和なる光を浴みて、
霞む夕日を禮拜す。

いかにこゝちよきぞ。

此の静けきけだかさに胸充ちて、

私の眼は涙なり。

(柳澤健「柳澤健詩集」ニ據ル)

月と草木とのさゝやき

いつしか雨はれて、明るき空よ。

さえぐくと美し、

濡れたる月の光。

まばらなる立木の枝より
雫の落つる音しげく、

なほ降れる雨かと思ふ。

一本の老木の根株、皮むけて

身をあらはせるに、

照りたる月は鏡のごと。

水白く流るゝ橋を

我が行けば、

我が影はあり、水の上に。

我は聞く、こよひ

月と草木のさゝやくを、
白き魂の聲するを。

(三木操「青き樹かげ」ニ據ル)

朝

霧はれて行く遠近に、

黄金の村はあからみぬ。

和らぐ聲は起り來て、

谷の底より立ちのぼる。

きらめく露は日をむかへ、

今日新なる幸を吸ふ。

(三木操青き樹かげニ據ル)

第十課 我が農業と對外貿易

我が國の農業は國內の消費を目的とするもので、農産物中直接に國外へ輸出せられるものは極めて少い。試みに大正十五年から昭和三年に至る三年間の統計の平均數字を見ると、豆類(ふんどろいんげんまめ等)の一千百萬圓、蔬菜類の七百萬圓、百合根の二百四十萬圓等が主なるものであつて、其他諸種の物を合計しても、僅かに年額二千數百萬圓に過ぎぬ。随つて我が内地農産物の輸出高は、内地農産總額の百五十分の一にも達しないのである。故に我が國の農業は、國內に於ける自給

を目的とするといつても誤ではない。

しかしかういつたからとて、決して我が農産物が國內に於て加工せられ、工業品として輸出せられることがないといふのではない。否、我が農産物で加工せられ、工業品として國外へ輸送せられるものは、頗る多種であり、多額である。先づ輸出貿易に於て第一位にある生絲を始とし、絹織物、砂糖、茶、小麥粉、麥稈、眞田及び其の製品、花筵、疊表、屑絲、絹、眞綿、人蔘、除蟲菊製劑、植物性油、酒、ビール等、總べてさうでないものはない。生絲だけでも、大正十五年から昭和三年まで三年間の平均輸出額は、七億三千五百萬圓の巨額であり、以上列舉したものを合計

すれば約十億圓に達する。これに國內農産物の加工品で、以上にもれたものの輸出を加へると、尙約二億圓は増加するであらう。更に繰綿羊毛等、原料を外國から輸入し、之に加工した後我が工業品として輸出するものは、約五億圓に上る。さうして農産物を原料としない金屬製品や、陶器や、機械や、鑛物等の輸出額は、總計約三億圓に過ぎない。以上を總括していへば、我が國の輸出總額約二十億圓の中、約六割が我が農産物の加工品であり、二割五分が輸入農産物の加工品であつて、殘餘の一割五分が、農産物を原料としない物の輸出額である。かう考へてみると、我が國の農業が、間接に我が輸出貿易

に對して、非常に大きな貢獻をしてゐることがわかるであらう。

我が國の農業はかくの如く重大な使命を果してゐるが、しかも食糧として、又工業の原料として年々に増加する需要を悉く充たすことは、今日では到底堪へきれぬ所となつた。先づ食糧に就いてみても、朝鮮及び臺灣から内地へ移入する米が、年々二億六千萬圓に達してゐる。これは我が國內に於ける移動であるから無視するとしても、尙此の外に國外から三千萬圓乃至一億二千萬圓の米を輸入してゐる。其の仕入先は印度支那、英領印度及びシムであり、近年はアメリカ合衆國からも

若干を入れてゐる。此の外最近では小麥七千萬圓、大豆四千六百萬圓を始め、鶏卵、鳥獸肉等、食糧だけで一年約三億圓を輸入する。更に工業原料として綿の六億三千万圓、羊毛類の一億四千萬圓、其の他を合はせて約八億圓を算し、之を前述の食糧と合はせれば、農産物の輸入合計一年約十一億圓に上り、最近の我が輸入總額約二十二億圓の半ばを占めてゐる。

農産物が今日の國際貿易上如何に重要な位置にあるかは、以上によつて略知ることが出來よう。そこで今かりに我が國の農業が、其の生産力の五分を増加したとすれば、優に今日の輸入超過年額約二億圓を補ふこと

が出来る。其の上かの輸入農産物の中には、或程度まで内國産を以て代へ得るものもあらうから、將來はさういふものの生産を振興することに努めねばならぬ。例へば朝鮮に於ける綿作、内地に於ける緬羊めんの飼育の如きこれである。朝鮮の綿作は既に相當の成績を擧げてゐるが、内地の農家に於て、副業的に緬羊を飼ふことも今後有望である。鶏卵の如きも嘗ては支那からおびただしい輸入を見たが、其の後内地養鶏業の發達と共に輸入額が減ずるに至つた。之に類することが、必ず他の方面にもあるに違ひない。

尙最後に注意すべきは、我が國が年々巨額の肥料を輸

入してゐることである。近年に於ける其の輸入額は、實に一年一億一千萬圓を算する。此の肥料の幾分でも自給肥料を以て代用することは、我が農業にとつて必ずしも不可能ではなからう。(那須皓日本農業論ニ據ル)

第十一課 緬羊

一 月寒の牧場

廣漠たる月寒つきさむかの牧場は、かゞやかしい陽光の下に緩く波打ちながら、遠くく續いてゐる。一望緑の毛氈せんの間に斷續する森や林、見果もつかぬ遙か彼方は煙つたやうに模糊としてゐる。總べてが北海道らしい雄大さである。



牧場の其處此處には、大空に漂ふ雲の塊のやりに、緬羊の薄黒い一團又一團が音もなく遊んでゐる。其の一團毎に附添うてゐる牧夫が、折々口笛を吹き、むちをあげて合圖を與へると、護羊犬が右に走り左に走つて、命令者の意のまゝに緬羊の群を誘導する。若し其の中の幾頭かが仲間におくれたり、列を離れたりすると、犬は後から追迫り、

或は行先をさへぎつて、見る間にもとの群に復させてしまふ。打見には動くとも思はれない雲の塊も、かうして何時か圓く又長く形を變へながら、次第々々に移り流れて行く。

牧草の葉末に燃えるかげろふを踏んで次第に遠ざかる群は、森に林に隠れて行き、漸く近附くものは、やがてはつきりと其の一匹々々の姿を見せて来る。どれもどれもむく／＼と厚い綿毛を着て、やさしい首をさし延べながら、肩を觸れ、頭を接して、何の争もなく草から草を食つてゐる可憐さ。其のほつそりした短い脚にも、物おぢするやうな愛らしい目にも、平和と柔順との外何

ものも認められない。

大空は限もなく晴渡り、月寒の廣野は果もなく續いてゐる。悠久の天と地、人も、獸も、草も、木も、此の大自然の中にみなぎつてゐるなごやかな空氣に包まれて、何時か其の中に溶込んでしまふのである。

二 日本の緬羊

ラシヤ・セル・フランネル・モスリン等の毛織物はもとより、帽子・シャツ・手袋・靴下・毛布等、其の原料は大抵羊毛である。今日の生活に於て、羊毛は我々に極めて密接な關係を生じて來た。随つて日本に於ける羊毛の消費は年を追うて激増し、底止するところを知らない。之を最近三箇

年の統計によつて見ると、一箇年の消費高七千六十万キログラム、其の価格は實に一億四千萬圓に達してゐる。しかも現状では、是等の羊毛は殆ど全部海外からの供給にまつ有様であるから、今にして自給の策を立てなければ、經濟上憂ふべき結果に立到ることは明らかである。我が政府も此の點を考慮して、大正七年以來緬羊の飼育奨励を行ひ、昭和三年には全國の飼養總數が二萬數千頭を算するに至つた。

高讀農四
緬羊の飼育は、我が國の農家の副業として將來相當に有望なものの一つである。緬羊は先づ買入に多額の費用を要しない。性質が溫和であるから、老人や子供の手

でも飼育し得られる。其の上、畜舎も簡單なものでよく、飼料も野草や藁や蔬菜の屑でたくさんである。故に農村に於ける飼養者は近來漸く増加し、最近では緬羊飼育組合さへ組織してゐるものがある。又緬羊の飼育が如何に農家の經濟を豊かにするかは、其の生産物を見ると了解せられよう。先づ羊毛の有望なことはいふまでもないが、どんな少量でも、手數を厭はず政府で買入れる規定の出來てゐるのは、數頭を飼育してゐる農家にとつて、誠に好都合である。のみならず、家庭で之を毛絲に作り、それで編物や織物を製するのをも、さしてむづかしいことではない。若し將來此の方面の家内工業が

發達して、かのイギリスやドイツなどに見るやうに、我が農村の婦人の手によつて特有の製品が出来ることにでもなれば、農家の副業に一生面を開くであらう。其の他、毛皮・肉・乳・骨・角・脂肪、皆それづくに用途がある。又羊肥は窒素・磷酸・加里の三要素に富む最も勝れた肥料で、桑・煙草・蔬菜等に特効がある。近年宮城縣の白菜が其の聲價をうたはれるに至つたのも、其の原因の一は、此の肥料を使用したためといはれてゐる。

我が政府は北海道の月寒・瀧川に種羊場を設けて、専ら緬羊の改良・繁殖、種緬羊の貸附・拂下及び種々の指導に當らせてゐる。其の他、或は講習會を開き、或は獎勵金を

交付して、二十年後には百萬頭に達せしめようと努力してゐる。

第十二課 ハワイ通信

拜啓先日は御懇書にあづかり有難く存候益、御壯健の由折角御勉強祈上候私事も丈夫にて愉快に執務致居候間御安心なし下されたく候さて本日は御返事かたぐ御参考までに當地の状況の一斑を申上ぐべく候
 當^あハワイはアメリカ合衆國の領土にて十餘の島より成立ち居候總面積は約一萬七千方キロメートル我が四國よりはやゝ小さき

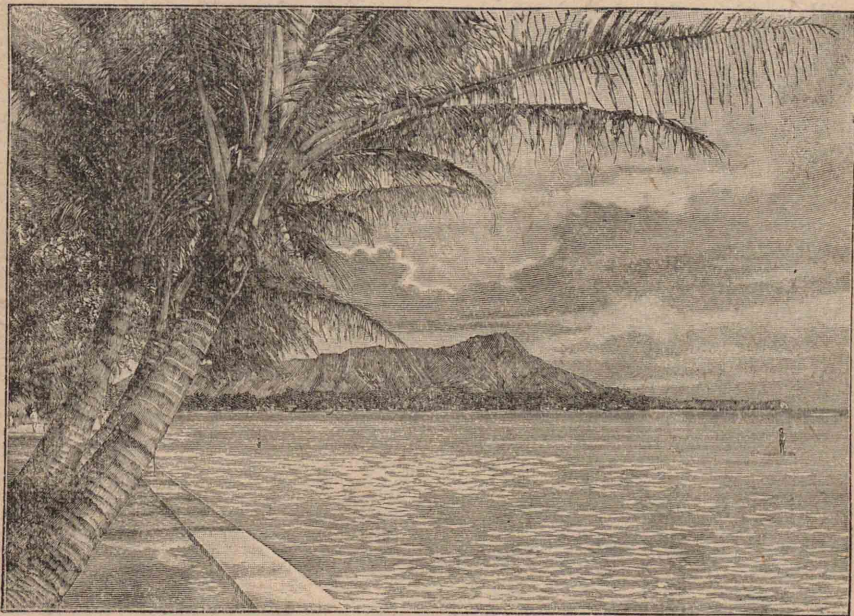
くらゐにて其の中ハワイ島が一番大きく次はマウイ島其の次はオアフ島に候小生が唯今在住致候ホノルルは此のオアフ島に在りハワイ第一の都會に候
ホノルルは我が横濱より三千四百海里アメリカ合衆國のサンフランシスコまでは二百海里これあり日米間航路の唯一の寄港地として此の間を航行する船は殆ど立寄らざるなく航海者にとりてハワイは全く洋上のオアシスとも申すべき地に候
本島の人口は三十餘萬に候が其の内土人は

其の一割にも足らず他はアメリカ人と各國の移住者にて候我が國人は明治元年より移住し始め今日にては約十三萬外國人中最も多數を占め居候多くは農業勞働者にて甘蔗ショウパイナップルコーヒの栽培製糖等に従事致居候また漁業に従事するものも相當これあり此の方面はむしろ日本人の獨占ドクケンとも申すべく候とにかく日本人が永年ハワイの産業の爲盡くしたる事は非常のものにて當地産業の發達は實に我が國人に負ふ所少からずと存候當地には斯く多數の同胞居住致

居候事として之を相手とする邦人商店の多きは勿論總領事館あり銀行あり其の他日本語學校百五十餘校邦字新聞社十數社神社寺院八十餘以て如何に日本人が當地アイモに活動しつあるかを御推察願上候アイモ日常の生活に於ても衣服食料品等本國の品物を求むるに何一つ不自由としてはこれなく故郷を離れて遠地に參り居る感は殆どこれなく候
當地はいはゆる熱帶圈内にある事として何人も暑熱燒くが如き處と想像致候へども參りてみれば案外にて絶えず海風吹渡り殊に驟

雨多きため存外涼しく氣温は年中十五度より三十度ぐらゐを上下し誠に心地よく候學校の冬休に子供等が海水浴をするなどは日本にてはとても考へ及ばぬ事なるべく候斯様に氣候に變化少きため年中植物のよく繁茂するは驚くばかりにて當市の名のホノルルといふも「ゆたか」といふ意味なりと聞及び候當地に參りて海岸に立ち並ぶ椰子の並木の見事なるには誰しも先づ一驚致す處に候が足一步島内に入れば此の外南國特有の常磐木ハ緑を滴らし其の下陰には紅黃紫白色と

りどりなる美花
咲亂れ更に傍に
は累々たる果物
のみりをるな
ど春とも夏とも
秋とも申されぬ
光景全くハワイ
は常春の國常夏
の國常秋の國に
て四季の最も好
きところのみを



集めし地とも申し得べく候殊におもしろきは四季の現象を一本の木にも見らるゝ事にて一方に若芽萌出でつゝある他方には綠葉茂り花美しき枝の陰には見事なる果物熟し居候

當地が自然の恵に浴する事豊かなるは植物にのみ限り申さず動物にも羽毛美しき鳥類非常に多く處により野生の孔雀七面鳥などの居るも珍しく候反對に猛獸と申すものは殆ど居らず多からんと思はるゝ蛇の全く居らざるも意外に候

終に最も美しき天象の事を申し添へ候當地
が熱地の常として驟雨多き事は前に記し候
が其の雨後の美觀は何とも申されず生ひ茂
れる椰子の間より白雲ふはりくと浮かぶ
かと思れば七彩鮮かなる虹にじの二重にも三重
にもかゝるなど内地にては想像も及ばぬ美
しさに候殊に此の虹は晝のみに限らず夜も
現れ夢のやうなる其の姿はさながらお伽話
の國に在る心地を致させ候又空氣清きため
空も限なく澄みをる事當地の一特色にて何
時も月色の美しき事日本の秋にも勝り候此

の月を眺めかの花に圍まれそよくと吹く
涼風の中に居る心地御想像をし下されたく
候

なほ此の外にもキラウエヤと申す火山の壯
觀當地特有なる魚類の美しさ土人が傳ふる
不可思議なる傳説など申上ぐべき事は數々
これあり候へどもそれ等は他日に譲り候太
平洋上日米の接觸點たる當地の貿易上其の
他より見て如何に重要な地點なるかはこ
こに説くまでもなき事と存候
とにかく當ハワイは煙波果なき太平洋上の

一オアシス否人世に隔絶せる一別天地否々
自然の恩惠めぐみ豊かなる極樂世界とも申すべく
小生は此の極樂中にありて毎日樂しく働き
をる事を申し添へて筆をとゞめ申候早々

年月日

西田洋一

青山 茂様

第十三課 手紙の認め方

手紙を認めるのは人と應對すると同じことで、先方の如何によつて、程々の言葉遣に注意せねばならぬ。尊貴の人に對して、粗略な言葉を遣へば、失禮になることはいふまでもなく、親密な間柄の人に餘り丁寧な文句を

用ひれば、却つて他人行儀になつておもしろくない。
手紙は又其の目的や場合の異なるに隨つて、精粗繁簡の趣を異にする必要がある。精密な説明を要する時には、長きを厭はず委曲を盡くして書くべく、父母に近況を知らせたり、友人の不幸を慰めたりするための手紙は格別として、普通の手紙はなるべく簡潔を旨とするがよい。殊に急を要するものには、出来るだけ贅言を挿まぬやうにせねばならぬ。多忙な人にくだしくしい手紙を出すのは、自分の徒勞はまだしも、先方の人に對して迷惑をかける所以である。人によると、餘り短いのは何となく手紙の體裁を具へぬやうに思ふが、手紙は用

事さへ通ずれば、短くともよいのである。本多作左が陣中から、一筆啓上。火の用心。おせん泣かすな。馬肥せ。といふ手紙を留守宅へ送つたといふ話がある。これでも用事は十分に足りたのである。

慶弔や慰問の手紙は、自分の身を其の人の境遇に置いて、十分の同情を以て書かねばならぬ。儀式一片で誠意の籠つてゐない文は、詞は如何にりつぱに書連ねてあつても、喜を共にし悲しみを分つ心の心を先方に達することがむづかしい。

對話の場合には、不明の點があれば直ちに聞返すことも出来るが、手紙の上ではそれが出来ないから、明瞭に

書いて、誤解の起らぬやりにするのが最も緊要である。年月日や氏名を省略したために間違を起したり、又文句の不備から先方の感情を害したりすることも珍しくない。

手紙の返事はなるべく速に出すがよい。之を等閑に附するときは、其の挨拶も書添へねばならず、益、書きづらくなるものである。手紙の返事を忘れたり後らせたりするのは、交際の道にも背くことになる。

手紙を認めるのは決してむづかしいことではない。人と對話するのと同じ心持で書けばよいのである。

第十四課

柳生宗矩

徳見大切

寛永十四年十一月十日、有馬玄蕃頭豊氏の家に猿樂あり。柳生宗矩も招かれて之を見る。酒宴半ばなる頃、宗矩が郎黨來り、主を呼出して、君は未だ知しめされずや。肥前國高來郡の土民等、悉く耶蘇の門徒にて、藩主松倉殿に叛き、有馬の古城に立て籠る由、筑紫より早馬來つて告申すによつて、板倉内膳正重昌追討の御使を承り、はや御發向候ひぬ。と申す。宗矩聞きて、さあらぬ體にて座に歸りて、豊氏に向ひ、急ぎて歸るべき事出來て候ふ。足早き馬貸し給へ。といへば、鞍置いて引つ立つ。急ぎ打乗つて、西を指して馳行き、品川に至つて、板倉は過ぎしか。と問ふ。今は遙かに進み給ふらん。と答ふ。馳行きて川崎

に至り、また問へば、今は二三里も隔り給ふべし。と答ふ。日は既に暮れなんとす。せん方なくて引返し、城に登る。日は疾く暮れてけり。近侍の人を以て、宗矩申すべき事あつて伺候しぬ。と申しければ、將軍光家やがて召して、何事ありて參りし。と尋ねらる。宗矩畏まつて、今日さる人の許に酒盛し候ふに、筑紫にて逆徒起り、内膳正追討の御使を承り、馳向ふと承りし程に、仰の旨と稱し止めばやと存じ、馬を走らせて追ひかくれど、追付かず、日暮れ候ふ故に、此の由を申さんとて參りて候ふ。といふ。何によりてか重昌を止めんと致しけるぞ。と問はるれば、君は唯並々の土民等叛逆せしと思し召さるればこそ、追

討の御使斯く軽く候カひつれ。總べて宗門シに就いて起る軍は、大事のものに候ふ。斯くては重昌必ず討死仕るべし。如何にも謀りて止めばやと存じ候ひし。と申す。以ての外の不興サにて座を立たる。

宗矩次の間に在りて、夜更くれども退出せず。將軍此の由を聞かれて、重ねて出座あり、宗矩を召す。重昌死すべしとは何故斯くは申すぞ。とありし時、宗矩、さん候ふ。それ兵の道は勇を以て旨と仕る。勇士は必ず死を恐れず。三軍の士をして悉く死を恐れざらしめんことは、古の能く兵を用ふる者も及び難しと承りぬ。凡そ下愚の人にして法を深く信じ候ふ者は、我が法を固く守りて死

するを以て身の喜とす。これ百千の衆、悉く期せずして必死の勇士と變ずる理にて候ふ。遠く例を引くまでも候はず。織田殿の兵威を以て伊勢の長島を攻めて、多くの大將を討たれ、諸卒を失ひ、年を重ねてやうく、に城を落さる。又攝津國大阪の城をば終に落し得ず、天子の勅命ミコノミコトノミをかりて、中直りして、軍は終りて候ふ。三河國の一揆は近く御家の事に候ふ。去りし大阪の軍に、重昌いまだ年若く候ふ時だにも、數十萬騎の中に唯一人選み出されて、大事の使承つたる程の者なれば、此の度の兇徒を亡さんに何事かあるべき、且は今の時御使承る上は誰か其の下知に背くべきなど思し召されなば、事の違

ひ候はんか。重昌が今少し位も高く、祿も厚く、又年頃重
き職をも司どつて、常に世にも人にも恐れ敬はれて候
はんには、誠に良き御使にこそ候ふべけれ。今の重昌の
身にて、西國の大名等の軍勢を催して城を攻めんに、一
度は御使を承りたるに恐れて、其の下知に従はんが、思
ふにも似ず攻めあぐみて候はんには、重昌如何に思ふ
とも、心に任すべからず。其の時に至りなば、御一門の人
か、さらば宿老の中を選びて、重ねて御使に遣はさる
るより外あるべからず。さあらんによつては、重昌何の
面目あつてか、生きて再び關東に還りて見參には入り
候ふべき。惜しき御家人を失ひ候はんことは、永き天下

の御恥辱にこそ存ずれ。あはれ、宗矩御許を蒙らば、追付
きて能くこしらへて、召具して參り候ふべし。」と憚る所
なく申しければ、將軍後悔の色見えけれども、更にそれ
もかなひ難くやありけん、夜いたく更けたり、まかり歸
りて休み候へ。」と暇賜はつて宗矩退出す。後に思ひ合は
するに、宗矩が申しし所、掌を指すよりも明らかにぞあ
りける。(新井君美、藩翰譜ニ據ル)

第十五課 國寶

我が國には到る處森嚴なる社殿あり。壯麗なる堂塔あ
り。名匠の手に成れる繪畫彫刻工藝品あり。由緒ある文
書典籍の類あり。また一世にあらはれし偉人傑士、後代

を導きし學者文人の舊宅の遺存せるあり。是等を觀る時、我等はそゞろに古の美術に魂を奪はれ、或はそのかみの歴史をしのびて、一種無限の感に打たれずんばあらず。

かくの如き建造物及び名寶は其の數頗る多く、之を諸外國に徴するに、其の豊富なること我が國の如きは比類けだし稀なり。これ畢竟我が國體と我が國民性との然らしむる所にして、其の我等國民に與ふる教訓は、實に至大なるものありといふべし。然れども是等は能く幾多の星霜變故を経て、幸に今日に遺存せるものにして、其の既に壞廢散逸せるものに

至りては、擧げて數ふべからず。若し其の保存の法宜しきを得ざらんか、國民の誇たるべき貴重なる遺物も、終には絶滅に至る恐なしとせず。これ國家が是等のものを國寶に指定し、其の保存法を設けて之を保護する所以なり。

國寶保存法に據れば、建造物・繪畫・彫刻及び工藝品等に於て、特に歴史の證徴となり、若しくは美術の模範となるべきものは、國家・公共團體の所有たると個人の所有たるとを問はず、ひとしく國寶として指定せらる。國寶はみだりにこれが原形を變更し、或は海外に輸出することを禁ぜられ、其の修理に際しては、必要に應じ國費

によりて補助せらる。

古きをたづねて新しきを知るは、我等の向上に缺くべからざる所。過去の文物を尊重し、これによりて今日の文明の由來を知るは、即ち將來に於ける國運隆昌の基礎をつくる所以といふべし。されば國寶の保存を圖り、永く過去の文物を傳ふるは、これ實に國家須要の事業たるのみならず、また國民の大いに力を用ふべき所なり。

第十六課 熊本城

熊本城は、かの勇猛無比の武將加藤清正の築いた天下の名城である。凡そ城郭といへば何れも堅牢であるが、

熊本城の如きは特に其の著しいものである。さればこそ武家時代の遺物でありながら、尙能く明治十年の役に慄悍な薩摩隼人の軍を引受けて、籠城の目的を達し得たのである。

熊本城は丘陵の一角に築かれ、坪井川及び白川の流を天然の堀としてゐる。随つて城壕の見るべきものは少いが、其の高い屈折を極めた石壘は確に一偉觀で、かの名古屋城の天守閣の築造者たる清正が築いただけに、此の石壘は實に堂々たるものである。城内の通路が複雑に屈折してゐることも、やはり防備に注意した結果に外ならぬ。ところが天守閣を始め、數多の櫓などの建

築は極めて質素である。名古屋城は五層の大天守閣が全部白壁で壯麗を極めてゐる上に、燦として尾陽の空に輝く金の鯨しやうけいによつて、益、其の名を天下にうたはれてゐるが、熊本城の建築は之に反して極めて見すばらしい。其の建物は黒い板張で、本邦城郭の特色ともいふべき白壁造ではない。又其の屋根の工合なども住宅建築に似たもので、城郭の壯麗を誇るべき外観は備へてをらぬ。

しかし城郭の價値は實用にあつて、外観には存しない。壯麗な威容も結構ではあるが、實戦に役立たなくては、何にもならぬ。熊本城は質素である。恰もなりの汚い野

武士のやうな趣がある。しかも實用の點には十分注意が屆いてゐて、外観は粗末でも設備に缺けたところはないのである。——熊本城の建築が黒い板張であるのは、敵の目標となるのを避けるためと思はれる。岡山城の天守閣も板張で黒いところから、昔から之を烏城と稱してゐるが、熊本城の如きはまさに「烏城」以上である。

壯麗な名古屋城を緋緘ひきの鎧よろい着て床机とこざしに腰をかけた大將とすれば、熊本城は黒皮緘の鎧に身を固め、大身の槍を小脇に、馬を陣頭に進めた百戰鍊磨の勇士である。此の點に於て、熊本城は其の築造者たる加藤清正の面影

を髣髴たらしめるものがある。質素儉約、しかも武備は一日も忽にしない、これこそ實に清正と熊本城とが一致する點である。

しかし清正は決して勇武一べんの大將ではない。人情に厚く、殊に領内の民政には一方ならぬ功績を擧げてゐる。例へば城の堀となつてゐる坪井川や、その他肥後の四大川といはれる球磨川、緑川、白川、菊池川に大工事を施して、水運灌漑の便を計り、新しく田地を開いたことも一再ではなかつた。しかも是等の大工事は後世に非常な恩惠を遺したもので、肥後平野の開墾は、朝鮮八道に鬼上官の名を馳せた猛將清正に負ふところが多

西暦 1940

高讀農四

いのである。殊に清正が試みた河流の護岸工事は堅固を極めたもので、後年大洪水で其の石垣が崩れた時、更に其の下に尙一重の石垣があることを發見した。これは萬一の際を慮つて二重に築いてあつたのである。之によつて用意周到な清正の面目を察することが出来る。熊本城が質素にして實用に缺けた點のないことも、やはり清正の事業として如何にも當然なこととなづかれるのである。(天類伸「改訂史蹟めぐり」ニ據ル)

第十七課 ローマの舊都

ローマ帝國の最も盛大なりしは、第一二世紀の頃にして、其の版圖はヨーロッパ、アジア、アフリカの三大洲にま

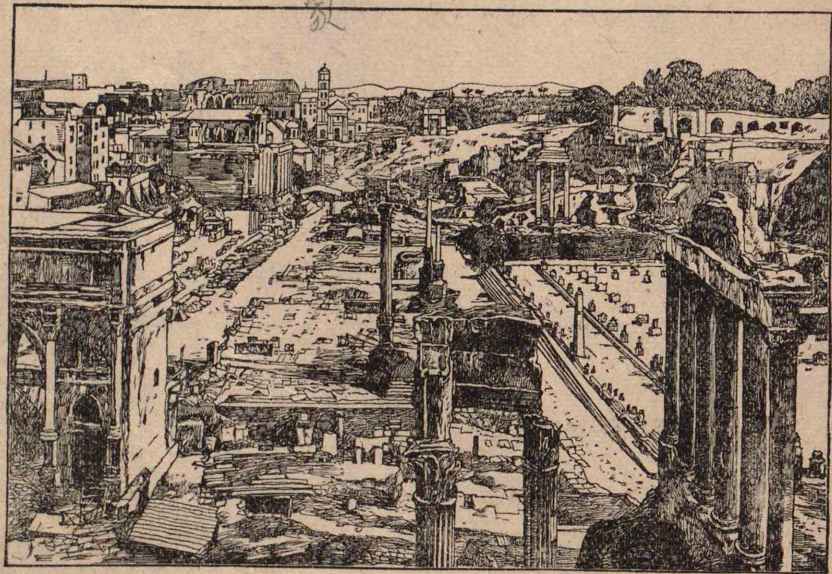
たがり、首府ローマは四方の富を集めて、壯麗善美、萬世不朽の都府たるを誇れり。然るに北方諸民族の侵入漸く劇しきに及び、驕奢に染み榮華に酔ひて柔懦風を成せるローマ人は、其の勢を阻止すること能はず、西曆三百三十年、コンスタンチン帝は遂に都をビザンチンに遷すのやむなきに至れり。是より後、さしもの都城も蠻人の蹂躪する所となり、宮殿堂宇其他壯麗なる建造物は多くは破壊せられ、市民離散して年々其の數を減じたれば、いはゆる不朽の大都も何時しか荒廢の極に達せり。

今のローマ市の繁華なる街路及び王宮諸官衙の在る

大なる廢墟
多し

處は、元のローマの邊隅にして、昔大廈高樓の櫛比せしあり、今は唯荒廢寂寞の巷たるのみ。ローマに遊ぶ者をして深き感興を催さしむるは、車馬絡繹たる街路にあらずして、丘陵の上、郊野の間に寂しき影を留めたる廢墟殘壁なりとす。

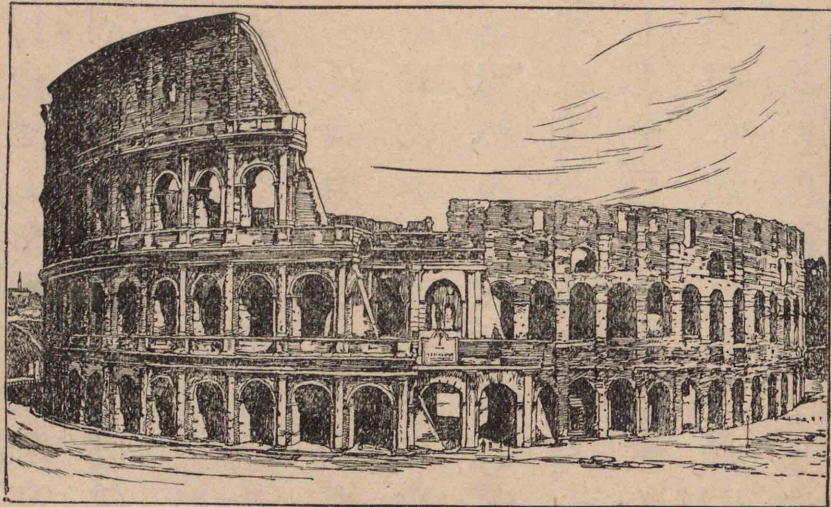
ローマに遊びて先づ觀るべきは、フォーラムの跡なり。フォー



廢墟殘壁

ルムは丘陵に圍まれ、中央政府・議會裁判所等總べて此
 の大國を支配せし機關の在りし處にして、一千八百七
 十年、イタリヤ政府之が發掘を開始せしまで、約千五百
 年間は全く土中に埋没したりき。丘陵の上より見下せ
 ば、三々五々並び立てる大圓柱の上に石梁の將に落ち
 んとして危く支へられたるあり、屋壁の崩れて石柱の
 み空しく聳えたるあり。傾ける石階、覆りたる礎石、所在
 に雜然たり。

フォームの東方に宏大なる橢圓形の建造物の半ば崩
 れたるを見るべし。これ即ちコロセウムなり。古代ロー
 マ人は勇猛なる行爲を好み、アジャ・アフリカ等より獅



子・虎・豹等の猛獸を集め來りて、
 奴隸をして之と格闘せしめ、一
 般公衆をして之を見物せしめ
 たり。コロセウムは即ち其の格
 闘場の稱なり。周圍五百二十五
 メートル、長徑二百十八メート
 ル、高さ四十八メートルあり。優
 に四萬五千人を容るゝに足れ
 り。其の落成式の際の興行は、百
 日の久しきにあたりて、五千頭
 の猛獸を殺せりといふ。毎年興

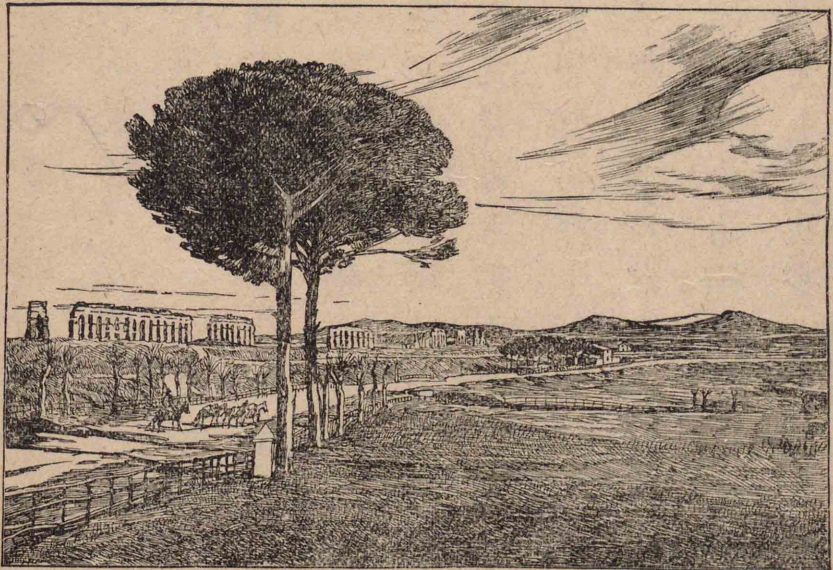
行の始るや、國民は狂喜して四方より來觀せり。中世諸國より來りし巡禮者等は此の壯大なる建造物に驚きて、

「コロセウムの立てる限はとこしへにローマはあらん。コロセウムの崩れん時は諸共に都も絶えて跡なけん。ローマの市の亡びなば、人の世界も共にまた。」と歌へり。今や其の内部は悉く崩壞して、僅かに外壁の半ばを殘せるのみ。コロセウムを見るは月夜を最も良しとす。巨大なる周壁の一部は明光に照らされ、一部は暗黒に鎖され、各層幾百の窓漏る光を以て、縦横上下に明暗の紋様を織りなす壯觀實に名狀すべからず。

又驚くべきはガラカラ帝の浴場なり。古代ローマ人は入浴を好み、到る處に浴場を設けたりき。なかんづくカラカラ帝の造れる浴場は其の最も廣大なるものにて、千六百の浴席あり。浴室の外、圖書室、談話室、化粧室、游泳場、遊戯場、庭園等の設ありき。今は唯大理石もて張れる床の一部と其の周壁の一部とのみを存すれども、附近に散亂せる大理石の彫刻を以て見るも、室内の裝飾の如何に華美を盡くしたりしかを知るべし。

ローマの郊外カンパニヤの平原をアルバ山の方へ通ずる一條の廣き道路あり。昔は繁華なる街道にして、勝誇りたる猛將勇士の意氣揚々として、アジャより、アフ

リカより、市民歡呼の聲に迎へられて、こゝに凱旋せしなり。此の道と殆ど並行して、高架水道の殘礎あり。蜿蜒として原野をわたりて、遙かにアルバ山に向へり。其の壁の高き處は二十メートルに及ぶ。カラカラ帝の浴場も其の水を此の水道に仰ぎしなり。野邊の千草の霜枯れて、滿目蕭條たる時、アルバの山の端を



高讀農四

出づる月の靜かに殘墟を照らすを見れば、誰か俯仰懷古の情を禁ぜんや。

第十八課 大樹

杉原先生

森の好きな私は、此の夏輕井澤の落葉松の森の中に小さい家を建てて、得意になつてゐた。どの窓から眺めても、見渡す限の草と木、其の末は遠山に連なつてゐる。これで大いに詩囊が肥えるくらゐのつもりで、内心頗る滿悦してゐると、ロンドンの本屋に頼んでおいたグレイ卿の自叙傳が届いた。それを開いて挿繪を見て、あゝ、やはりだめだと嗟歎した。其の挿繪といふのは、「銀の樅」と題して、グレイが自分の

家の庭の大樹の下に立つてゐる寫眞である。其の樞の木は百二三十尺もあるであらうか。私は其の寫眞を見て、或莊嚴な感じに打たれた。千年の風雨に打たれた高い木が、すつくと青空に聳えてゐる姿を見ると、頭の下るやうな氣がする。子供の時からかういふ大樹の下に生ひ立つたから、グレーにはあのやうな悠揚迫らざる風格が出来てきたのだ。私はさう思つた。さうしてそよ風に揺れる低い落葉松の姿を、寂しい心持で眺め渡した。かういふ木を毎日見てゐたのではだめだと思つた。私はイギリスに遊ぶ毎に、一木能く森をなすやうな大きいかしはの木を、汽車の窓から眺めて感歎する。あゝ

いふかしはの古木を眺めながら、イギリス人は生ひ立つてゐるのだ。私は又オランダのヘーグ郊外にある大森林の菩提樹とぶなの雄姿を忘れることは出来ない。イギリスに先立つて議院制度を世界に示したオランダ、あのヨーロッパの一角で孤壘に據つて新教と民權を擁護したオランダだけに、やはり大樹を保存し、讚美することをお忘れなさい。パリー郊外のフンターヌブローの森も壯大だ。アメリカ合衆國ではニューイングランドの榆の木、蒼空に迫る老樹を打仰ぎながら、私はよく初代植民人の心意氣を想望した。

北平の町では、雄大な槐の木が遊子の魂をとらへる。蘇

東坡が三槐堂の文中に、王祐が大樹を庭に植ゑて、子孫に偉人の出ることを待つた心持を歌つて、王城の東、晉公のいほりせるところ、鬱々たる三槐、これ徳の符。あゝ、よいか。といつたのも同じ心であらう。老樹を崇むる心は、人の世の悠久を思慕する心である。限なく天に向つて伸びゆく巨木の姿には、紛々たる眼前の得喪を忘れしむる威容がある。かゝる大樹を多く保存する國民のみが、千波萬波起伏重疊する治亂興亡の外に立つて、久遠の生命を保存するのであらう。社會問題といひ、時代思想といひ、經濟政策といひ、それ等一切の現實問題の根柢には、大地にどつかと根を下し、大空にすつくと

伸上る大樹の力がなくてはならない。かく大樹を讚美する情操を抱いた私は、つい先頃土佐國に遊んで、長岡郡大杉村の山腹に生えてゐる日本一の巨杉を見た。樹幹二百尺、亭々として雲に入る此の大杉は、二千年の齡を重ねてゐるといふ學者の推定である。そこに日本國民の運命の暗示を見たやうに、私は嬉しかつた。さうして私は五十鈴川のほとりに立ち並ぶ莊嚴な杉の林を思ひ浮かべた。それはいろくの意味で日本國民の象徴である。(經濟隨想所載鶴見祐輔ノ文ニ據ル)

第十九課 鬼怒川の畔

冬の日光は岡の畠一ぱいにさしかけてゐる。岡は田と

櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれ、他の一方は村から村へ通ふ街道に接する。

田は岡に沿うて狭く連なつてゐる。田圃を越して、竹藪まじりの林が延びてゐる。竹藪の間から草家がぼつぼつと隠見する。帯草を中途から切つて捨てたやうに枝を廣げた櫟の木が、其處にも此處にもすく／＼と突立つてゐる。

鬼怒川の土手には篠が一ばいに茂つてゐるので、近くの水は其の陰に隠れて見えぬ。上る白帆が篠の陰から半分だけ、しかも大きく見える。土手の篠を越えて水がしら／＼と見えるあたりは、もう遙か上流である。だか

ら篠を離れて高瀬舟の全形が見える頃は、白帆は遙かに、さうして小さくちゞまつてゐる。篠の上には對岸の松林が連なつて見え、更に其の上には筑波山が一脚を踏張つて、他の一脚を上流まで延して聳えてゐる。冬の筑波山は、常磐木の部分を除いては赤黒く焦げたやうである。其の赤黒い頂上に、點を打つたやうに觀測所の建物がぼつちりと白く見える。空氣はやゝ不透明ではあるが、それでも尙針の先でつゞくやうに、其の白い一點を際立つて目に映せしめる。

櫟の林は、田と鬼怒川との間をつないで横に續いてゐる。田も遙か先は櫟林に隠れ、鬼怒川も上流はいつか此

の林にさへぎられて見えなくなる。櫟の木にはびつしり赤黒い葉がくつついてゐる。林の上には兩毛の山々が雪を載いて、それがぼんやりと白い。

かくの如き周囲を有して、岡の畠は朗かに晴れてゐるのである。土は乾ききつてゐる。既に二三寸に伸びた麥は、岡一ぱいに薄く緑青を塗つたやうに見える。

~~其處~~も此處にも農夫が小さく動いてゐる。大抵は芋掘の人々である。三四人の手で芋を掘つてゐる畠の縁には、馬が茶の木に繋いであり、俵が轉がつてゐる。各自の手元は忙しい。しかし岡は唯のどかなさまである。日はやゝ傾いた。忽然筑波山の絶頂からまばゆい光

がきら／＼とさして來た。毎日略同一の時刻に、此の光は此の岡へ強くさしかけて來るのである。農夫の或者は、筑波山で火を燃すのだらうなどといつてゐる。しかしそれは觀測所のガラス窓が日光を反射するのである。岡の畠に變化が起つたとすれば、數時間に唯これだけである。ガラス窓の反射はやがて消えてしまつた。芋掘の人々は勿論此の光に氣が附かなかつた。街道へ下り口の畠にも、一組が芋を掘つてゐる。芋の間には小麥が二うねづつ作つてあり、それが弱々と生えてゐる。芋の莖はべつたりと、うでたやうである。女は芋の莖を庖丁でもとから切つて、先へ出る。後から男が

鍬の先で芋の株を掘起す。びか／＼と光る鍬の先を、ぎつくと芋の株へ斜に突立てて、ぐつと持ちあげると、大きな土の塊がふはりと浮上る。鍬をそつと抜いて先の株へ移る。小麦に障らぬやうに極めて丁寧掘つては、先へ／＼行く。女は莖を切終ると後へもどつて、掘つてある大きな土の塊を両手で二尺ばかりあげて、どさりと打ちつける。細かな土がほぐれて、小芋の塊から白い毛のやうな根がぞろりと現れる。それから小芋の塊を両の手のひらでぶり／＼とほぐして、やがて俵を立てて入れる。さうして掘つたあとの穴を手のさきでならし、次の塊をほぐす。乾いた畠に濕つた圓いあとが一

高讀農四

つづつ殖えて行く。日光が其の土を後から／＼と、細やかに乾かして行く。(長塚節山鳥の渡ニ據ル)

第二十課 土の匂

金子 薫園

ねむの花山の湖畔の夕ぐれにひと木ほのかに立ちてあるかも

窓下に植ゑしトマトは葉のしげり實の重ければ地に觸れてけり

枯芝をたけるほのほの日に黒み凍る水田にうつりたるかな

與謝野晶子

夏(夏)の風山より來り三百300の牧マキの若駒わかこま耳ふかれ
けり

秋(秋)十月や野にあるよりも何よりもとくうらが
れし屋根やしねの草くさかな

秋(秋)雜木まじりより薄すすの丈だけのたちまさりその穗ほ眞白まじろく

靡なく山やまかな
前田夕暮

春(春)黒土くろつちにはこべもまじるふるさとの水菜みずな畠はたけの
雨あめあがりかな

夏(夏)すゝらんの花はなすゝらんの花はなをここゝに霧きり白しろ
きなかに靡なきあひにけり

冬(冬)烏くろくろく大きく麥畑むぎはたけの上に影かげひき飛去とびり
にけり

若山牧水

夏(夏)朝山あさやまのみどりみどりが下の道みちゆけば露つゆふりこぼす

夏(夏)百鳥ひゃくちようのこゑ
あぜあぜに立つもろこしの葉はの長ながき葉はの垂たりて

夏(夏)露つゆけきこよひの月夜つきよ
はたくと茅かやがやが原はらの日ひあたりあたりに機織はた織蟲むし

は音ねたててとぶ

第二十一課 雪

「夏蟲なつむし氷こおりを知らず」といふ語ことばもあるが、熱あつい國くにの人ひとは雪ゆきの

美觀を知らない。空が薄墨色に曇つて、底冷ヒヤがすると思ふ中、何時か篩ふるでふるつたやうな細かな白い片々ぺんぺんが落始める。見る中に天地一白、葉一つもない冬木立も、常磐木の林も、綿をかけたやうに眞白になり、金殿玉樓も茅屋も、差別なく同一の色に埋められる。路上の泥も隠れて、人の足跡、車のわだちが残るかとするれば、又忽ちに降埋められる。路行く人は鶴の羽衣ハシロを着て往來すると、昔の詩人は見立てた。花の美は地上の一部分に止るが、雪の美は天地を一つに包んだ壯觀である。多くの草花の枯果てた時節、自然は又此の壯觀を與へて、我等の心目を一新するであらう。

高讀農四
高讀農四

雪の景色は、水邊・山間何處としておもしろくない處はない。

雪の江の大舟よりは小舟かな

芳川

は水上の風光。

山の雪夜は家ある火影かな

奇淵山

は山中の夜景。

長々と川一筋や雪の原

凡兆

見渡す限り野山は雪になつて、川ばかりを埋め残した景色である。

旅人の外は通らず雪の朝

去來

松原に飛脚小さし雪の暮

一品

に街道往還のとだえがちな寂しさを思へば、

箱根越す人もあるらし今朝の雪

旅人に我が糧分つ深雪かな

に雪中の山路の困難は一層思ひやられる。

狼の聲揃ふなり雪の暮

荒熊のかけ散らしてや笹の雪

深山の荒涼たる景色、身にしむ心地がする。

戸にさはる音も静けし夜の雪

雪折れも聞えて暗き夜なるかな

といふやうに、夜中降通して降積つた幾尺の雪、朝の眺

の美しさよ。

芭蕉
几董

丈草
北枝

如洋
蕪村

高讀農四

静かさや雪のあしたの金閣寺

灌園

何時か朝日が輝き渡つて、

美しき日和になりぬ雪の上

太祇

第二十二課 鱈場蟹

我が水産輸出品中、世界的名聲を博せるものに蟹の罐詰あり。詳しくいへば俗にいふ鱈場蟹の脚の肉を罐詰

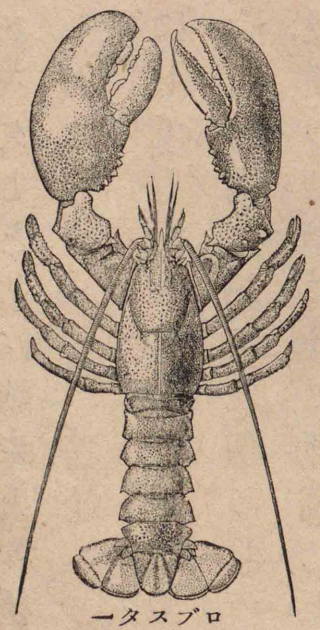
にしたるものにして、輸

出先はアメリカ合衆國

を第一とし、イギリス及

びオーストラリア之に

次ぐ。かの北アメリカ及



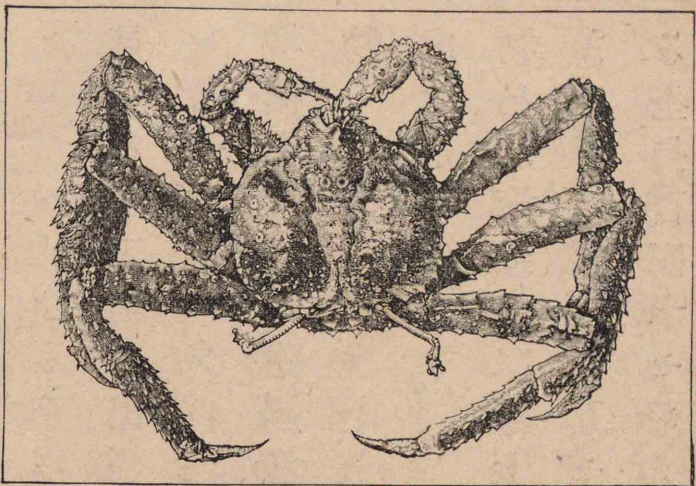
び北ヨーロッパに産するロブスターと共に、歐米人の極めて稱讚する所なりとす。

鱈場蟹は北太平洋の特産にして、しかも水溫零度乃至五六度の海中にのみ棲息す。我が國に於ては、初め北海道小樽の近海、釧路及び國後島の沿岸に於て漁獲し、更に北見の沿岸、利尻島及び樺太の沿岸に於て一時盛に漁獲したりしが、漸く昔日の盛況を見ず。よつて昭和二年以降、一時是等の地方の一部を禁漁區としたりしかば、其の後漁場は遠くカムチャッカ半島の沿海に及ぶに至れり。

しかるにカムチャッカ半島は外國の領土なるが故に、我

が漁船は領海三海里以外の公海に於て従業せざるを得ず。随つて漁獲物を陸揚して、之を罐詰工場に送ると甚だ困難なるを以て、こゝに外國にも未だ其の例を見ざる蟹工船の出現を見るに至れり。蟹工船は二千トン乃至六千トンの汽船にして、之に最新式の罐詰製造機械を装置し、附屬漁船のもたらし來るに随つて漁獲物を直ちに處理し、數時間の工程にて罐詰の製造を完成するものなり。

初め北海道及び樺太沿岸に於て漁獲せし頃は、雄の大きき、甲の幅二十五センチメートル、左右の脚を延したる全長百四十センチメートルに及ぶものありき。其の



後次第にかゝる巨大なるものを見ず。現今カムチャツカ半島沿岸にて漁獲せらるゝものは、甲の幅十七センチメートル、全長九十センチメートルを以て平均大とす。鱈場蟹といふ名稱は、嘗て北海道沿岸の鱈の漁場に於てたまく漁獲せられしことありしより起れるものなり。其の形一見蟹の如しといへども、實はやどかりに近し。即ち五對の脚の中、最後の一對が著しく萎縮せる、腹部の柔軟にしてしか

も左右對稱ならざる等、總べてやどかりに見る特色なり。

第二十三課 東西雜話

吳の國に延陵の季子といふ人があつた。或時主君の命で他國へ使に行く途中、徐の君をたづねた。徐の君がつくづく季子の劍を見て、口にこそ言出さなかつたけれど、如何にもほしさうな様子をした。季子はその心を察したけれども、君命を奉じて使する途であるからと思つて、與へなかつた。使の任を果して歸路に立寄つて見ると、徐の君は既に死んでゐた。季子は大いに悲しみ、かの劍を其の墓の側の木に結び附けて歸つた。從者が怪

しんで、徐の君は既になくなられたのに、誰に與へられるのか。といふと、自分はさきに心の中で與へようと思ひ定めてゐた。其の人が死んだからとて、初の志を變へるわけにはいかぬ。といつた。

引力の法則を發見したイギリスの理學者ニュートンは、學術の研究に熱心を餘り、折々日常の事柄に物忘をすゝるくせがあつた。或日、いつもの通り書齋に立て籠つてゐると、召使が朝食を用意しようと思つて、生卵と鍋を持つて來た。ニュートンは、自分で煮るから、其處へ置いて行け。と命じた。暫くたつて來て見ると、これはしたり、卵は机の上に残つて、鍋の中では懷中時計がくたくたと

煮え返つてゐる。

春秋の頃、晏嬰といふ人が齊の國の相となつた。其の御者が馬にむちうち、揚々として得意になつてゐた。御者の妻がそれを見て、夫に、晏子は身のたけ五尺にも足らないが、齊國の相として、諸侯の間に知られてゐる。しかも思慮深く、出入にも人に下る様子がある。君は身のたけ六尺以上もありながら、御者となつて得々としてゐるのは、如何にもあさましいことではないか。といつた。夫は大いに恥ぢて、其の後行を愼んだので、次第に高官に任用せられたといふ。

ドイツのコンラード王がウルフ侯を攻めた時のこと

である。ワインスベルヒの町は久しい包圍に落城の運命に陥つて、明日はいよいよ開城といふことになつた。其の時城中の婦人から歎願があつて、開城の時には、婦人が各自其の背に運ぶものだけは許してもらひたいといふ。其の願は直ちに許された。さて翌朝城門から續出て來る婦人を見ると、皆其の夫や親兄弟などを背負つてゐる。城主も亦其の夫人に背負はれて列の中に居た。寄手の軍勢は是はけしからぬと怒つたが、王は笑つて、王者に二言はない。許せよ。といつた。後漢の鮑宣の妻は、字を少君といつた。宣は少君の父に就いて學んだが、少君の父は宣の清貧に安んじて勉學

するのを感じ、遂に娘を宣に嫁せしめた。少君の家はもともと富貴であつたから、持參の衣類・道具總べて善美を極めた。宣はそれを見て、御身は富貴の家に生まれて美衣美食に慣れてゐる。それに反し我は貧賤であるから、如何にも釣合はない。といつた。すると少君は、父は君の志に感じて私を嫁せしめたのである。既に一旦嫁した以上は、何で夫の心に背きませう。と、其の日から侍女を返し、美衣を脱ぎ、短い布子を着て、小車を引きながら、宣と共に郷里に行つて宣の母に會つた。これより薪水の業を自らして、婦道を行ふこと誠に固かつたから、感ぜぬ者はなかつた。

フレデリック大王はプロシヤ近代の名君といはれた人である。軍隊を檢閲する毎に、何時も兵士に向つて三箇條の問を出した。第一、年は幾つか。第二、服役以來何年か。第三、俸給も用品の給與も十分か。の三問である。或時フランス生まれの新募の兵が、不日檢閲があるが、ドイツ語がわからぬと當惑してゐると、一人の同僚が、王の問はかくくの順序であるから、かくく答へよ。と教へてくれた。其の日になつて、王は第一に問うた。

王、服役以來何年か。

兵士、二十一年。

王は驚いて、

王、年は幾つか。

兵士、三箇月。

王はいよゝゝ驚いて、

王、汝の言ふことは更にわからぬ。朕と汝とどちらかが狂つてはをらぬか。

兵士、兩方とも。

第二十四課 ボアソナード君の歸國を送る詞

一日朝早く、余はボアソナード君を永田町の家に訪ひたりしに、君は例の如く文机によりて、餘念なく法條を起草しをられたるが、其の顔色疲れて常ならず覺えければ、病やある。と問ひしに、病は斯くなん。とて、其の脚を

第一級
本邦に於ては、
となりて、
の品類、
轉地療養、
わつた事



示されたり。見れば二つの脚共に水色になりてはれ太りたり。余は、何故に靜かに養生し給はざるか。」と問へば、「司法大臣と約束ありて、某の日までに若干箇條を起草し終へざるべからず。此の義務は病によりて背く能はず。」と答へられたり。余且は驚き且はおぼつかなく思ひて、急ぎ山田司法大臣の邸に至り、此の由を告げけるに、司法大臣も共に驚かれ、即ち秘書官栗塚君を遣り、君を訪問せしめて、速に轉地療養あらんことを勧められけり。君は

高讀農四

約束當事者の命を受けて、始めて心おきなく田舎に轉養せられたり。

佐藤が譯して、
轉地療養の事

余は此の時家に歸りて、密かに歎息して思へらく、凡そ司ある人々にして、斯くまでに深き義務心に伴なへる勉強を以ていそしみたらんには、立法事業並びに諸般の事の擧らざることやあるべき。」と。此の事一小件なれども、余は將來ポアンナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價值ありと信ずるがために、別に臨みて之を公衆の前に述べ、君の二十年間の立法上の功績の如きは、他の諸君の演述に譲りてこゝに多言せず。余は實にポアンナード君と二十年來の友なり。場合に

よりては我が師なり。さるを病を以て餞はなむけの席に臨むこと能あたはざるは、これぞ遺憾の極みなる。今書して君の旅たび行の安全を祝し、併せて左の詞を以て君を餞す。

余は、君が嘗て我が國くにを呼びて第二の本國といへりしことを記憶す。余輩は將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に、君も亦長く第二の本國を忘れざることを知る。ボアソナード君よ、君の第二の本國が立法上及び諸般の事業に於て如何に發達するかを見て、幸に余輩の爲に必要な注意と勸告とを怠ることなかれ。

(井上毅「梧陰存稿」ニ據ル)

第二十五課 道德と法律

法律を遵奉するといふことは、國民の重大な義務であつて、法律の命ずる所は道德も亦之を命じ、法律の禁ずる所は道德も亦之を禁ずるのは、いふまでもないことである。しかし法律は唯國民利福を増進し、社會公共の安寧秩序を保持するがために、國家が權力を以て定められたものであつて、道德に比べると、其の範圍は遙かに狭い。

餘財の有る者が、公共の爲に應分の義捐ぎとんをするといふやうな事は、法律が命ずる事ではないが、道德は善事として之を奨励する。集會訪問等に約束の時刻を違へるやうなことは、道德上からいへば、非難すべき事である。

が、法律は禁じない。是等は唯其の一例に過ぎないけれども、我々の日常の行爲は、法律の支配によるものよりも、道德心の發動によるものの方が多し。されば唯法律の命ずる所を行ひ、法律の禁ずる所を行はないだけでよいといふことの出来ないのは、明らかである。

債權者に對して、債務者が約束の期限になつて其の債務を果さない場合には、法律は、之を法廷に訴へ、財産差押の處分を請求する權利を與へてゐる。けれども道德上からいへば、少しも債務者の事情を察せず、法律の與へた權利だからといつて、むやみに之を行使するやうなことは、人情にもとるものとして、甚だしく擯斥せら

れるであらう。さればたとひ法律は許しても、道德は必ずしも之を許さないことがある。法律上有する權利はあくまで之を主張し、他人の自分に對する義務はあくまで之を強要して、道德に背かないものと思ふならば、それは非常な誤である。さればとて、其の權利に對する義務を有するものは、固より之を果さなければならぬ。之を怠るのは道德も許す所でない。道德は必ずしも法律の與へた權利の行使を許さないが、法律の命じた義務は必ず之を果すことを命ずるものと思はなければならぬ。

之を要するに、法律の命ずる所は必ず之を行はなければ

ばならず、法律の禁ずる所は決して之を行つてはならぬ。法律の禁じない事でも、之を行ふべきや否やは、更に道徳上の考量を要する。又法律は人間の爲すべき行爲の一部を示すものに過ぎないから、人間の爲すべき事は、法律の規定せる以外に多々あることを知らなければならぬ。

第二十六課 鯨

一年の産額五十萬トン、數量からいつて我が水産物の王であり、世界産額の四分の一以上を占める鯨は、古くからの傳統で、漁獲の大部分、否、殆ど全部が肥料にされてしまふが、翻つて歐米諸國を見ると、鯨は食料として

非常に尊重せられ、随つて水産貿易に於て國際移動高の第一位に在る。殊にスコットランドから産出する塩水漬樽詰及び燻製の鯨は、品質からいつても、數量からいつてもまさに世界第一と稱せられ、ノルウェー・オランダ等も亦鯨の産出國として有名である。

我が國の近海では、日本海・オホーツク海から太平洋にかけて鯨は棲息するが、日本海では富山縣以北及び朝鮮の沿岸、太平洋では茨城縣以北の沿岸に於て漁獲せられる。なかんづく北海道の西海岸で漁獲せられるものが、本邦産額の大部分である。

今、北海道小樽附近の鯨の漁期に就いていふと、略三期

に區分することが出来る。凡そ二月の上旬頃沖合から水深約百尋餘の處に來り、それが次第に陸へ接近して、三月下旬頃始めて沿岸に現れ、産卵するのがいはば第一期のもので、走鯧と呼ばれる。これは概して年齢も長じ、體形も大きい。これに次いで沖合から次第に押寄せ、四月中旬頃沿岸に來るのが第二期の中鯧、五月に入つて來るのが第三期の後鯧で、年齢からいふと中鯧はやや若く、後鯧は更に若い。北海道のみならず、一般に日本海岸では、三月下旬から五月下旬にかけて漁獲せられるから、俗に春鯧の名がある。

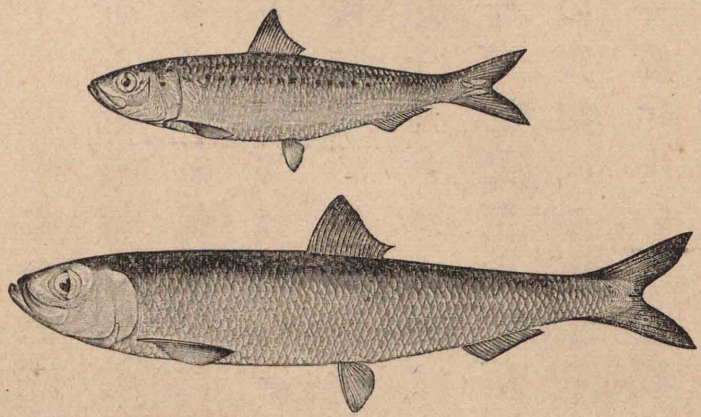
太平洋岸では、漁期が五月に始まり八月に終るから、北海

道では夏鯧といはれ、體形が最も小さいから小鯧ともいはれてゐる。その他ばかりいなし、かどいなし等、地方によつて異なる俗稱がある。

要するに春鯧の大部分は、産卵中か、若しくは其の直後のもの、夏鯧は多く未成長のもので、何れにしても歐米産のやうに美味でない。随つて之を輸出して廣く販路を世界に求めることが出來ぬ。唯走鯧と、樺太近海に於て秋季漁獲し得る秋鯧とは、品質が頗る優良であつて、將來輸出品として望を囑すべきものである。現に十餘年前樺太沿岸の秋鯧をシカゴに輸送したところ、世界一等品といふ好評を得たのであつた。

ヨーロッパ産の鯧は春秋二季に産卵するが、これは果して同一種が二回の産卵をするのか否か、まだ明瞭でない。我が近海から廣く太平洋にかけて棲息する鯧は、春季一回の産卵をなすもので、總べて同種類である。随つてアラスカやカナダに於て漁獲せられるものも、本邦産と同種類であるが、我が國とは大いに事情を異にし、漁期が十月初旬に始るので、産卵期の疲勞全く回復し、魚體肥満し、且甚だ美味である。しかもカナダでは、我が國で盛に漁獲する産卵期を以て禁漁期とし、専ら親魚の産卵を保護してゐる。

鯧の産卵數は一尾に就き五萬粒内外であつて、六七度



の水溫に於ては二週間で孵化する。孵化後一箇月で二センチメートル餘、三箇月で七八センチメートルの大きさになる。此のくらゐまでは沿岸に棲んでゐるが、九月頃十センチメートル内外の大きさにになると、沖合へ移動する。鯧は一見いわしに似てゐるが、よほど大形で、最大のもの長さは約四十センチメートル、重さ約五百グラムに達する。さうしていわし

よりも形が扁平で、體側にはいわしに見るやうな並列した圓い黒色の斑點がない。

我が國では昔から鯨の産額を數へるのに石數を以てする。これは肥料にするしめ粕から起つた計算法で、しめ粕百石は重量として四千貫即ち十五トンであり、實際の魚の數約三十萬尾に當る。北海道では、昔は百萬石以上を漁獲したこともあるが、近年は減少して先づ六十萬石乃至七十萬石を以て平年漁としてゐる。之を魚の實數に換算すると、かりに七十萬石として無慮二十一億尾といふ大數である。

鯨の製品は、歐米では塩水漬樽詰を最多とし、外に燻製

と罐詰とがある。我が國では食料として身缺・塩製・かすのこ等があり、近來は燻製もあるが、大部分はしめ粕として肥料にするのである。

第二十七課 ゆく川の

加藤千蔭

ゆく川の水をくもでにせきわけて苗代いそぐ時は來にけり
刈残すおくての稻葉打ちなびき田の面遙かに霰ふる見ゆ
をちかたの畑やく煙打ちかすみ春おもほゆるみ山べの里

村田春海

入日さす遠山もとの里みえてかすみを漏る
る夕煙かな

明けぬとて鳴くやきさすの聲のうちにほの
ぼのしらむ春の山畑

朽ちのこる門田の鳴子音さへもうづもれは
てし今朝の雪かな

僧 良 寛

柴やこらん清水やくまん菜やつまんしぐれ
の雨のふらぬ間に
うづみ火もやゝ親しくぞなりにけるをちの

山べに雪やふるらん

橋 守 部

煤たれし宿をもおのが古巢とてあはれ今年
もとふつばめかな

あら田うつ真鍮のあとのたまり水すみなれ
がほに蛙なくなり

夏くれば野邊といふ名もりづもれて草の葉
山となりにけるかな

見渡せばまだ水かれぬ冬の田のあぜのうね
うね雪つもりけり

第二十八課 露の臺

去年私の家の庭に一本の櫻の木を持つて来て植ゑてくれた人があつた。其の木は私の庭に来る前何處にあつたのか知らぬが、根に附いて来た土から一むらの落が生えた。それが、此の春雪が消えた跡に、いち早く十五六も臺を出してゐた。

「おや、あんなにたくさん落の臺が出てゐる。」と、子供たちまでが見つけて喜んだ。

何といつても、雪消の地面で第一のあいきやうものは落の臺である。あのみづくしい淡綠色の、いかにもへうきんな恰好かかたをした落の臺は、早春の景物けいぶつの中でも、私の最も好きなものの一つである。單に景物として眺め

るだけでなく、私には舌に其の風味を味はふことが、早春に於ける樂しみの一つである。あの色、あのかをり、さうしてあのほろ苦かい味、——私は毎年それを味はぬことはなかつた。

今年も早速庭の櫻の根もとから先づ一つを採つて来て、其のいかにも早春らしい風味を味はつた。

それにしても、櫻の木を私の庭に植ゑてくれた人は、落まで持つて来てくれるつもりはなかつたに相違ない。それが偶然にも、今、私にかうした喜を與へてゐる。此の落フキは去年の春まで何處でこんな風にしてゐたのか、それを思ふと一層深い興味が湧く。雪の消えた跡に、或朝

ふと其の一群の落の臺を認めたまらな懐
かしさを覺えた。さうして「よく生きてゐてくれた。」そん
な感じさへした。

其の落の臺もいつの間にかもうほぐれて、伸びて、花を
咲かせてゐる。其の陰からは既にたくさん芽がのぞい
てゐる。やがて花がほゞけて風に飛び、臺は枯れて莖が
伸び、葉が大きく廣がることであらう。さうして静かな
雨を其の葉にうけて、さびしく快い音を立てること
であらう。(相馬昌治「静と動との間」ニ據ル)

第二十九課 峠の茶屋

「おい」と聲をかけたが、返事がない。

軒下から奥をのぞくと、煤けた障子が立て切つてある。
向側は見えない。五六足の草鞋が寂しさに庇からつ
るされて、屈託げにふらりと揺れる。下に駄菓子
箱が三つばかり並んで、側には小錢が散らばつてゐる。
「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せてある白の上
にふくれてゐた鶏が、驚いて目をさます。くゝくゝと
と騒ぎ出す。敷居の外に、竈が今しがたの雨に濡れて、半
分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜が掛けてあるが、
土の茶釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ下はたきつけ
てある。

返事がないから、無斷でずつとはいつて、床机の上へ腰

を下した。鶏は羽ばたきをして、白から飛下りる。今度は疊の上へ上つた。障子がしめてなければ、奥まで駆けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で「こけつこつこつ」といふと、雌が細い聲で「けつこつこつ」といふ。まるで自分を狐か犬かのやうに思つてゐるらしい。床机の上には一升ます枘程を煙草盆が閑靜かんせいに控へて、中にはとぐるを巻いた線香が、日の移るを知らぬ顔で、頗る優長にくすぶつてゐる。烈はげしかつた雨は次第に收おさまる。暫くすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がざらりとあく。中から一人のばあさんが出る。どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃え

てゐる。菓子箱の上には小錢が散らばつてゐる。線香はのんきさうにくすぶつてゐる。どうせ出るにはきまつてゐる。しかし自分の店を明放あけしても苦にならないと見えるところが、少し都とは違つてゐる。返事がないのに、床机に腰を掛けて、何時までも待つてゐるのもおもしろい。其の上出て来たばあさんの顔が氣に入つた。二三年前、高砂たかさきの能を見たことがある。其の時、これは美しい活人畫だと思つた。杉ばうきを擔かいだばあさんが出て来て、そろりと後向になつて、ぢいさんと向ひ合ふ。其の向ひ合つた姿勢しせが今でも目につく。自分の席からはばあさんの顔が殆ど眞向に見えたから、あゝ、美しい

と思つた時に、其の表情はびしやりと心のカメラへ焼き附いてしまつた。茶店のばあさんの顔は、此の寫眞に血を通はした程似てゐる。

「おばあさん、此處をちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「あいにくなのお天気で、さぞお困りでござんしよ。お、お、大分お濡れなさつた。今火をたいて乾かして上げましよ。」

「其處をもう少し燃しつけてくれ、ば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、唯今たいて上げます。まあお茶を一つ。」と立上りながら、「しつくと二聲で鶏を追下げる。こゝと驅出した鶏は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛出す。雄の方が逃げる時、駄菓子の箱の上へ糞をした。」

「まあ一つ。」と、ばあさんは何時の間にか、刳拔盆の上に茶碗を載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆書きの梅の花が三輪、無雜作に焼き附けてある。ばあさんは袖無の上からたすきを掛けて、竈の前へうつくまる。自分は懷から寫生帖を取出して、ばあさんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑静でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。こゝらは夏も鳴きます。聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「あいにく今日は………さつきの雨で何處へか逃げました。」

折柄竈の内がぱちくと鳴つて、赤い火がさつと風を起して、一尺餘り吹出す。

「さあ、おあたり。さぞお寒かる。」

といふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに、

微かなあとをまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、好い心持だ。お陰で生返つた。」

「いゝ、工合に雨もはれました。そら、天狗岩が見えます。曇りがちな春の空をもどかしとばかりに吹拂ふ山嵐の思切よく通り抜けた前山の一角は、未練もなくはれ盡くして、老婆の指さす方に、荒削の柱の如く聳えるのが天狗岩ださうだ。(夏目金之助草枕ニ據ル)

第三十課 國語と愛國心

高潔勇健なる大和魂と相待ちて、古來我が國民の共同團結を固うしたるものは、純正溫雅なる日本語なり。日本語は即ち日本國民の間に流るゝ精神的血液にして、

日本民族は此の精神的血液によりて統一せられ、此の最も鞏固にして且永遠的なる連鎖の爲に散亂せざるなり。されば一朝國家の大事あらんか、日本語の響く限り、幾千萬の同胞は、共同一致直ちに難に赴き、あくまでも力を盡くして、死して悔いざるなり。若し又慶報に接せんか、北の果も南の端も、一齊に君が代を歌ひて、國家の幸運を祝福するなり。

日本語は又我等日本人の慈愛深き母なり。我等の生まるゝや、此の母は我等を其の膝の上に迎へ取り、懇に國民的思考力と國民的感動力とを教ふるなり。此の母の慈愛や誠に天日の如し。いやしくも此の國に生まれ、此

の國民たり、此の國民の子孫たるもの、誰か此の光を仰がざるべき。

國語には、我等が心中に一日も忘れかぬる生活、殊に人生の神代ともいひつべき小兒の頃の記念を留む。我等が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果てて眠に就かんとせし時、母君は如何に優しき聲にて寢よとの歌を歌ひ給ひしか。頑是なき子供心にわるふざけなどして遊び廻りし折、厳しき父君は如何に嚴かなる教訓を垂れ給ひしか。さては秋の山路に分入りて餘念なく栗の實を拾ひたる、あるは春の麗かなる野邊にれんげさうなどを摘歩きたる、總べて其の當時より用ひ來れる言語は、當

時の人名、當時の地名と共に、えも言はぬ快感を我等に與へずんばやまず。

次には學校にての言葉、職業により、階級により、地方によりての言葉等、皆それ々の生活を其の上に反映す。顧みて過去の生活を思ひ、目のあたり現在の幸福を思ふ時、何人も此の言語の恩澤を蒙り、此の言語に感謝の意を表せざるはなかるべし。

國民が其の國語を尊ぶことは一種の美德にして、偉大なる國民は必ず其の自國語を尊び、情の上より自國語を愛し、理論の上より其の保護統一に従事し、以て國民の愛國心を養成せんことに力む。

凡そ何れの國を問はず、いやしくも國家の觀念の上より、其の一員たるに恥ぢざる人物の養成を以て教育の目的とする以上は、先づ其の國の言語、次に其の國の歴史、此の二つをないがしろにしては、決して其の功を收むること能はず。これ國民たるものの須臾も忘るべからざる事なり。(上田萬年「國語のため」ニ據ル)

432トの附

高等小學讀本 卷四 終

昭和十二年四月三十日修正印刷
昭和十二年五月四日翻刻發行
昭和十二年六月四日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文
部
省

高等小學讀本卷四 農村用

昭和十三年度
臨時定價 金拾參錢

ち

昭和二十二年五月五日
文部省檢査濟

發行所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
翻刻發行
兼印刷者 代表者 石川正作

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場
印刷所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社

後

高橋

廣島縣豊田郡久野村
松崎高橋



Handwritten signature in blue ink